

太平樂
櫻桃



091786-000-9

特29-362

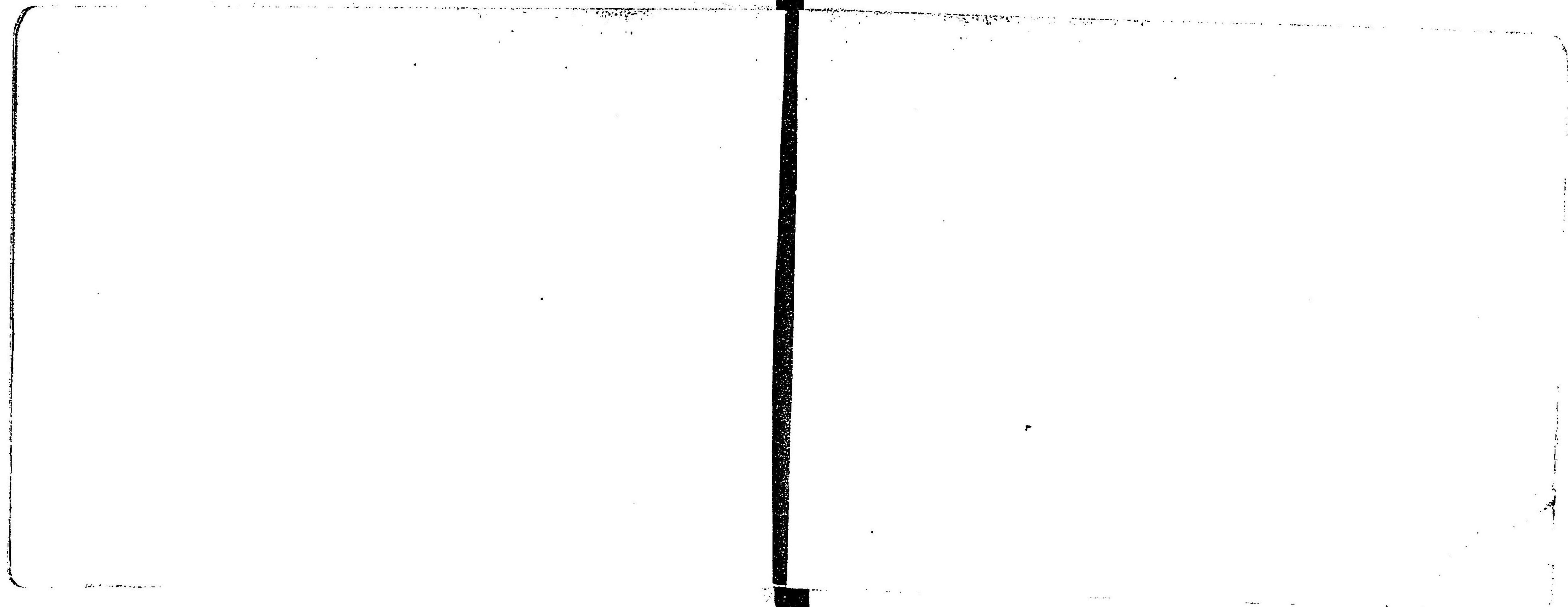
太平樂

武田櫻桃/著

M41

DBO-0301





特29

362

笑文庫第貳編
滑稽百話

太平樂
武田櫻桃著

東京 光村合資會社出版部發行

光村
1942
丙午

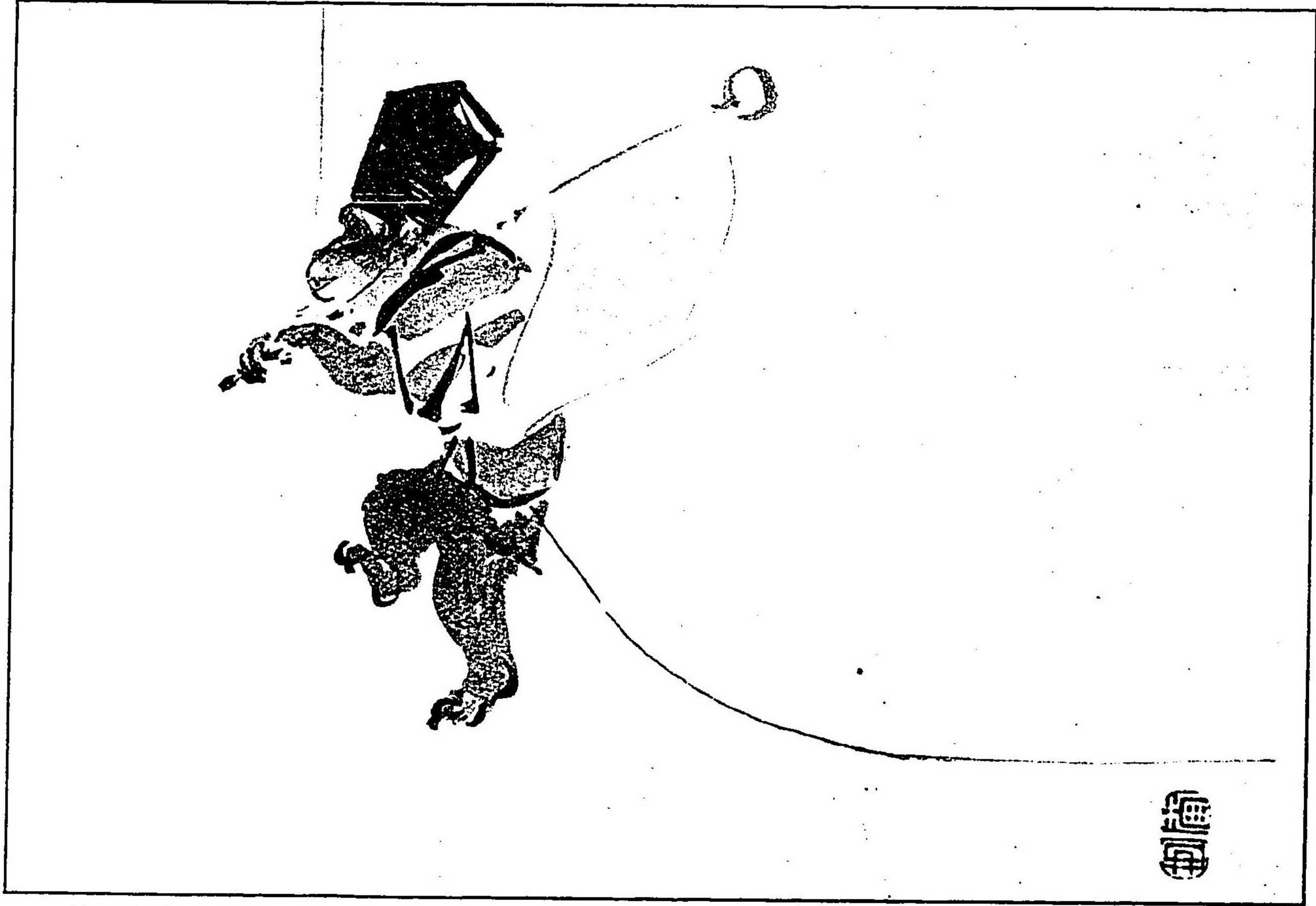
笑文庫序

世には雨を喜ぶものあり、また曇天の趣味を好しとするものなきに非ず、而かも麗日和風を晴明の天気を愛せざるものに至つては蓋し稀也。

明治の世、文壇の盛なる、百花爛漫として庭に満ち、珠玉傑然として地上堆をなすが如きものあり、殊に近時に至りては、文藝の發達顯著にして、述作さるゝもの饒多、書を讀むものをして、また多くの遺憾なからしむ。而も退いて案頭を悩めば、其の多きは人生の悲愴、哀歎、憂悶に主題を取らざるものにして、所謂雨を喜び曇天を好しとするの一面のみ、彼の日麗かに風和かに、人生の晴明を語らんとするものに至りては、寥々として未だ多くの供給あるを見ず。樂天愛人、欣々として世に活きんことを願ふものにして、豈に多少の遺憾なきを得んや。

是れ實に我笑文庫出版の企圖せられたる所以也。世間また吾輩と感ずる人の少からざらん歟。庶幾くは大方の翼賛を藉り得て以つて徐に吾輩の所期を全うせん。

明治四十一年春 光村合資會社出版部にて 黒田湖山識



製社會資合村光

叟 猿 (筆 鳳 柄)

版 色 二

凡例

- 一 此書載するところ、明治三十七年末より同四十年末に亘る時事を諷せしもの頗る多し、故に一面に於て同時代の滑稽歴史たるべし。
- 一 書中掲ぐるところ、多くは寫眞畫報、文藝俱樂部、太平洋、滑稽世界、笑、中外商業新報誌上に、魯西奈佛乃至無署名を以て掲載せるもの、こゝに一團と爲せるに過ぎず、而も此書の成るに及んで、以上諸雜誌新聞が特に著者の爲め轉載を請はれたる好意を深謝す。
- 一 此書を集録するに當り、箕輪霞東、中島吾兩君の勞を煩したるところ頗る多し、これまた著者の深謝するところなり、而も出版に關しては黒田湖山氏に負ふところ極めて多し。

手前味噌

江戸文學と申しますもの、中、最も好く江戸趣味を發揮し居りますのは、川柳と一口話とでござりまする。で、また此川柳と一口話とは江戸時代の文學を代表致したものと云つても宜しい位で、人情の機微を穿ち、時事風俗を諷し、寸鐵人を刺すの概がござりまする。

けれども其餘りに時事と密接致しまする爲めに、時代を経過致しますると、全然譯らない洒落になり了るが多くあります。川柳の難句など、申すが多く此類で、非常に巧んだ句などになりますと、當時ですら説明を要さねばならぬがあり、従つて折角苦心の名句も、時代の経過によつて、全然没要領のものになつてしまふ例がいくらもあります。

一口話もまたそれで、醒睡笑、鹿の巻筆、齋の宿替其他の集を見ましても、今は僅かに當時の俚の捕捉し得られるもあれば、また全

然没要領のものも尠くはござりませぬ、これ等難解のものを努めて解釋すると云ふ事も、また極めて面白い研究の一つでござりませうが、川柳乃至一口話の身上と云ふものは、要するに時代の精神に透徹するか、若くは人情の機微に觸れまして、讀んでその所謂「うがち」なるものに拍案の利那に存するものでありますれば、後から種々と解釋して、註解を加へましたところが何の興味もござりませぬ。そこで此一口話と云ふものでござりまするが、古人の作に見ましても、随分駄洒落に落ちて居るものや、無理屈、考へ落のものも、うござりませぬ。殊に近代のものに至りましては、只「下げ」がありさへすれば好い、落ちさへすればいゝと云ふところから、會話や地の文に重きを置かず、乾燥無味に落ちて居るものが大分あります。

けれども、本来一口話なるものは、僅々五行乃至七行の間に千萬無量の滑稽を云ひ現はさねばなりませんので「下げ」まで讀まずとも

其文章、其會話に自然の滑稽が含まれて居ねばならぬと考へます。令嬢は令嬢らしく、壯士は壯士らしく、世話女房は世話女房らしく、真面目の間に自から滑稽趣味を帯びて参りまするから、そこで始めて「下げ」も生きて参るのではござりませぬか。

私は以上の考へから、二三年以來時事を捉へては拵へて見ましたが、中々思ふやうにうまく参りません、矢張駄洒落や考へ落になつて、文章や會話も多くは死んで居るものばかりではござりまするが、何も研究の端と存じ、こゝに百話 太平樂と題して出版する事に致しました。これから随分十年二十年と閱しましたら、中には没要領のものも出来やうと思ひますが、それは前にも云つた通り、川柳や一口話には免れ得ぬところと存じまするから、此書に掲げた全部が没要領となる時代が来やうとも、自分は少しも憾みとせぬ積りであります。

殊にこゝに掲げたものゝ大部分は、明治三

十七年未から明治四十年末に亘つてのものであり、随分特種の出来事が多かつたので、假令ば、三十七八年戦役後の騒擾事件とか、検問所の設置とか、戒嚴令とか、巡邏夫とか、電車値上げとか、電車市有とか、可也多事の時でござりまするから、これ等を諷したのも、また妙くはなからうと存じまするが、私は前記の趣意によりまして、一切註釋を加へぬことと致しました。明治三十七八年の活歴史を御承知の方々が、「は、ア」と膝を拍たればそれで満足致すものでござりまする。

明治四十一年三月

櫻桃識

太平樂目次

仙笑記(十題)……………(一頁)
 大わらい(十五題)……………(一四頁)
 十二新笑(十二題)……………(二二頁)
 百味膳(卅五題)……………(三一頁)
 笑賣往來(十五題)……………(四九頁)
 一説三笑(十九題)……………(五七頁)
 寸善尺寬(十七題)……………(六六頁)
 涼み壺(十五題)……………(七五頁)
 娛笑樂(二十二題)……………(八五頁)
 一品一笑(八十二題)……………(九五頁)
 傾智利楨(八題)……………(二八頁)
 一筆啓笑(二十六題)……………(四三頁)
 豆鉄砲(二十六題)……………(五八頁)



仙笑記

果報

「此間西洋の新聞を見たら、かう云ふ事が書いてあつた、ある富豪の爺さんが、もうそれ年も老つたし持つて居る何百萬兩と云ふ財産

滑稽百話

太 平 樂

武 田 櫻 桃 著

を相續する者がないと云ふので、毎日電車に乗つては、車掌の手の届きそうもない所に居る人の切符を取りついだとある、益らないと云ふ勿れ、これから話は佳境に入るのだ、先づ其人がさ釣銭でも取るとするかね、自分で車掌の出した釣銭に一錢足しては取次いだか人間と云ふやつは不正直なもので、誰一人此釣銭は一錢多いよと云つて車掌に返す者が一人もない、するとある日一人の少女が「もしもし車掌さん、是は一錢多ございます」と正直に返したのを見ると、爺さんぼんと横手を拍つて矢鱈に感心し、其の少女の後を慕つて、家を見届けると、翌る日出直して行つて、とう／＼其少女を養女と定め、何百萬兩と云ふ大した財産が、皆少女の物になつたと云ふ事だ」と、一人が云へば「成程西洋の人は違つた所がある、俺も今に其少女にあやかつて同じ果報が来るかも知れねえ」と濟すから、「何

だ君も何ぞ善根を施した事でもあるのか」と聞くところともよ。此間の事だが、電車で淺草へ行く道さ、車臺の中は芋を揉むやうな人なので、車掌は大狼狽さ、そこで僕が公德を重じて、切符受渡係を務めたね、先づ五六人迄は無事だつたが、何でも六人目の新造が二十錢銀貨を拙に渡して「什麼も憚りさま」と来たものだ。「よし来た」と例の受取て「オイ車掌さん、往復だよ」と切符を受取りて、釣銭を見ると十二錢しか無え、「車掌さん、往復は七錢だらう、(改正車賃)釣銭が一錢足りねえせ」と云はうと思つたが、何しろ混雑の中ぢやアあり、車掌はもう車掌臺でボールの網へ捕つて居る始末だから、「え、此身の不性と諦めろ」と自腹を切つて其新造に渡したと思ひなせえ』それから什麼したえ』それでお仕舞さ』何だ、益らねえ、それが何に豪えものか』だつてよ、西洋の少女つてのは現在多いのを返

してせえ、其位の果報があつたらうぢやねえか、俺のを見ろ、無いものを返したのたものを、一倍正直に違えねえ、今に屹と果報が来るよ、それで来ねえやうなら、日本は未だ開けねえさ』と云つた。

極端

『今年は丙午年と云つて、此年生れた女は男を食ふと云ひますし、又男が生れると女を食ふとか云ひますから、今年ばかりは子供の出来ないやうに氣を注げやうぢやありませんか』と妻君大に警戒の形と相見えたり。『何、それは迷信さ、何もさう恐れる事もないが、さう云ふ舊習の存して居る間は、先づ拵へん方が上策ぢや』と旦那様も妻君次第、互に警戒懈りなかりしが、いつの間にか妻君の腹がぼんぼこらんと膨れたり。『あら貴郎、とうく出

来ちまつたのよ、什麼しましよう』と狼狽へるを、旦那殿は澄したものの、『いや丙午の年に生れたのは運がえゝと云ふ事ぢや、世間の没分漢に見せつけてやりたく思ふよ』と、善意の解釋。此處まで来れば度胸が据ると心得給へ。『さうですね、秀吉は丙午の生れですつてね、秀吉のやうの子を生んだら今年の中にもう一人拵へやうぢやありませんか』と云へば旦那殿莞爾として『さう續け様に生む事は戌の歳の事にしやうぢやないか!』

妾税

經濟學者兩三輩某倶楽部の煖爐を取圍んで荐りと租税論の水を懸け合つて居る『いや戦時税の繼續などと云つてさう長く續く筈がないのぢやから、政府は此際新税源を見出すが必要ぢやよ、眞逆に人頭税もとれまいが、未

だく探したら随分莫大な税源が見えやうと思ふんぢや』あるともさ、第一別荘などと云ふものは贅澤の極ぢや、あんな物にはうんと重税を課するぢやね』と云ふと一人のもぢや髯が口を入れて、『別荘よりも妾の方が贅澤ぢや、妾税と云ふものを取つたら大分の税源ぢやあるまいか』成程それは名案ぢやね、妾税とは好い趣向ぢやが、牡丹侯のやうに手當り次第と云ふのもあるのぢやから標準が餘程六ヶ敷いて』何、構ふものか、君、あゝ云ふのは特別税として割を高くすればえゝぢやないか』議論結了！

勘當

勘當された俵、始めの中こそ女の子に引取られて、長火鉢の前に脂下つては居たものゝ、とうとう裸足にされて木賃宿へ冬籠りの體と

まで身を食ひ狭めたので、大に後悔の臍を咬み何がなして詫を入れ、元の若旦那に返りたものと通を潰しながら思案したが、元來頑固一點張の親爺の事故、大體の事にては勘辨すまじと尙更智慧囊の底を拂つて居ると、ユサ、ユサ、！それ地震とあつて而も平常より大きいのに、此處ぞと砂糖袋へ蛇の目を書いて頭へすッぽり、木賃宿の心張棒を押取ると、韋駄天走りに店の前へ駈けつけたが、大音聲に『阿父さん、これですく！』と地震加藤の身振をして見せると、親爺帳場から、『此處は巢鴨ぢやねえぞ！』

道心

ある男、友達の買馴染の女郎を見て、自分も買つて見たくなり、什麼かなして手に入れんと工夫の末、長い髪の毛を剃りこぼち鬚も

取拂つて、人相を變へ、初會の積りで澄して居るを、女郎も見た事のあるやうな人と思へど、初會と云ひ張るに其儘馴染となつて居たのを、友達喚ぎつけて吃驚し、直ぐに飛んで行つて、『お前と云ふ男は！、ちやアねえ俺と云ふ男はだ、また間違へた、お前と云ふ女は、一體まア女郎にもあるまじき、いやさ女郎だから仕方がないとした所で、現在友達と知りながら馴染になるとは怪しからん、あの青道心はいつか俺が連れて来て、瀬川を買はせた男ぢやねえか』と急きかけるを、女郎は一向平氣で煙草の烟を輪に吹いて居る、『お前も眞逆俺の友達とは思はなかつたらうが、飛んだ事をしてくれた』と今度は恨みまぢりに言ふ知つてましたとも、貴郎のお友達には違ひないとは思つたけれど……』『けれども什麼した』『什麼もしやしませんわ、長い髪の毛を剃つてまで妾を思つて下さるかと思ふと、妾其、

志が嬉しくツて、つい馴染にしたのですわ』
 『何だ頭を剃つたから馴染にした、ちやア俺も明日から坊主になるから、あの男はもう客にしてくれるな』と云ふと、女郎は涙を零しながら、『貴郎は髪を剃るよりも足の毛を剃つて来て下され！』

轉地

『なに肺が悪い、それは警戒す可きだせ、甚廢工合だえ、呼吸でも苦しいか』『苦しいね、二三間歩くと倒れさうだ』『そいつは事だ、愈肺結核と来たかえ』『多分さうだらうと思ふ』
 『血は出まいね』『出るよ、日に一合位は出る』
 『脅かしちやア困る、實際かえ、其容體ちやアもう一期や二期ちやアないな』『あゝ、もう三期卒業と云ふのだ』『ちやアかうし給へ、八丈島へ行くさ、彼處は大體の肺病は癒るさう

だ、行き給へ行き給へ」と勧めたので、肺病
先生八丈島へ渡つたが、間もなく歸つて來た。
「什麼した癒つたかえ、大府効力のあるもの
だな」と云ふと、「癒りやアしないよ、彼處も
いゝには違なからうが、どうも滋養物に乏し
いので、反つて病氣の進むやうな氣がしてね」
「滋養物が乏しくてはさうだらうが牛肉位あ
りさうなものだな」それがなから心細いと
云ふ事よ」「成程無理はねえ」と考へて、「ぢや
アかうしろ、今度は神戸がいゝ！」

墓 地

「先づ人間は衣食住と云つて、衣て、食つて
住めばいゝやうなもの、先き立つものは金
だ、いゝかね、そこで僕は外國の貴賓類々と
して來朝するところから考へたのだが、一大
ホテルを建てるとして、先づ一番下が銀行で

金さ、二階に呉服を陳列して衣さ、三階へは
ランチを設けて食さ」「四階はないのか」「大あ
りよ」「其處は何になる」「病室」「五階は！」「墓
地にでもしやう！」

廣 告

「知人娘十八耳朶膨大他に缺點なし容貌普通
相應の收入ある人に縁づけたし、尤も先方の
家庭によりて夫婦共稼ぎを辭せず」との廣告
を見て、結婚を申込んだ男の言草がいゝ、「小
生年二十五、兩足極めて大、他に缺點なし、
容貌普通月十四五圓の收入あり、共稼を望む」
とあつて、出雲の神様も什麼お考へ遊ばした
か、此縁不思議に纏つて、愈々顔を合せて見
たら、娘は耳の大きい筈、電話交換手、男の
足も大きい筈、これは郵便脚夫であつた。

見物

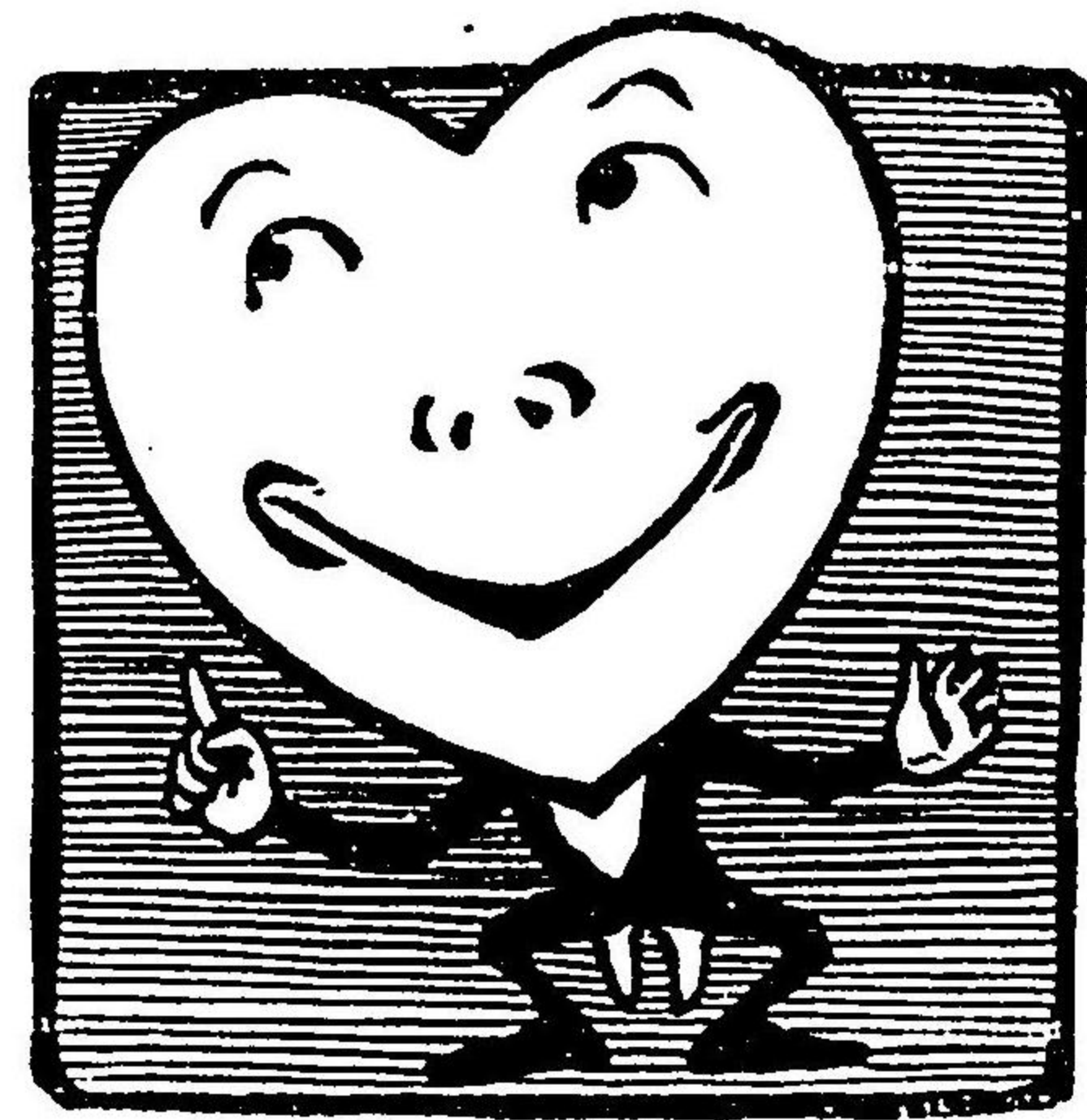
田舎者案内されて淺草見物と洒落れ、花屋敷へ這入て見る。先づ虎を見ると、「これは大きな猫だ」と云ふ、案内者痛み入つて、「それは虎と云ふ獣だ」「そうかね、俺は猫の大きいのかと思つた」とまた先きへ行く、鱧の刺製を見ると「やア大けえ蜆場だ」「いやこれは鱧と云つて印度に居る動物だ」「さうか、珍らしいものばかりだ」と木戸を出ながら木戸番を見ると「やれ立派な猿だぞ！」

凱旋

東郷大將日本海々戦に首尾よく勝つて、勇名を世界に輝かされた當時、御心配なされた戦さが勝つて、甚麼にまあお悦びの事だらうと幕僚の面々御機嫌を伺ひに来て見ると、何

がさて以ての外の不機嫌に、これはまた什麼した事、と面々呆氣に取られて、大將には此大勝を目出度は思し召されぬか」と云へば大將苦い顔をして「今回の大勝は自分も目出度存するが此先凱旋と云ふ曉歓迎が定めし苦しからう」と云はれた。
(三十九年六月稿)

酒がまたあがると云つて餘計飲み車掌だけボール外して浮れ出しお静かな暮でと女房嬉しがり價をつけるだけは大きな事を云ひ秋冷を覺ゆと劍士肌を入れ



いらわ 大

九月五日

九月五日の騒擾後検挙で忙がしい警察署へ、一人の男が駆込んで『さりやした、すつぱり切りやしたから御安心下さい』と云ふ、詰合の警部は吃驚仰天『なに、斬つたと、一體何を斬つたのだ』と睨みつけると男は涙をぼろぼろと溢しながら、『實はたつた今情婦と手を切りました』と云つた！

大津 繪

戒嚴令施行から主相官邸界限は酷しい審問『こらく、其方は何處から何處へ行くのか』巡査は威長高になつて調べると、男は何と思つたか懐中を押へてもちく／＼する『懐中のものは何だ』『これは………でございます』『一應検めるからさう思へ』するりと引出すと縞の財布『中は錢だらうな』『いえ／＼娘のしてくれました用意の握飯！』巡査はきよ／＼ととして『あゝ大津繪で来やアがる』

樺太蒲團

學生が二人修學旅行して木賃宿へ泊つたが、さて寐る時になると蒲團が一枚、引冠つて同衾したところで、夜着は双方引張り合ひの姿

となつた。「いやそれでは餘り君の方へ行きすぎる」「なアに君の方が餘程多く着て居る」と議論の上、一人が應て起き上つて夜着の中央へ洋杖を縦に載せ「これからが北緯五十度以南だよ！」

千字文

子供が荐りと千字文を學んで居る側に、先生は新聞を讀んで居たが、子供「天地玄黄、宇宙洪荒」すると先生釣り込まれて「臥薪嘗膽、屈辱講和」子供は不思議さうに手本を見て「先生そんな字はお手本にはありません！」

巡邏夫

戒嚴令施行後各區とも巡邏夫と云ふものを置いて、町内の警護にした。提灯に拍子木、

カチ／＼カ、チと廻つて居ると、迂散臭い男にひよつこり逢ふ「貴様は何者だ」と大喝！
「へい／＼刑事でございます！」

檢問所

檢問所の前を通るには洋杖を持つて居れば咎められる、羽織を着なければ檢問されると脅かされた男「そんなら一體甚麼風をすれば無事に通れるね」と聞くと「先づさうだな仔虜なら大丈夫！」

三笠艦

「三笠が沈んだと云ふが眞個かね」「眞個ともさ新聞にちやんと出て居たらうちやないか」「東郷大將は何だしたらう」「大將はい、鹽梅に上陸して居た時だつたとよ」「さうだらう、

さうに違ふねえ』と頷いて『東郷大將が居れば三笠だつて沈む筈がねえ！』

乗換へ切符

小待合の女將この不景氣に鬱ぎ込み、女中を對手に盛返しの工夫をして居る『かう不景氣ぢやアまつたくやり切れないが、儼は切符で遊ばすやうにしやうと思ふが什麼だらう』
『それは思ひつきです』と女中は乗出して『一圓均一がよござんすね』それで中途藝者がかはつた時は什麼しやう』乗換へ切符でいい事よ』

見習車掌

見習の車掌『次が呉服橋でございます、次が拾物町でございます』と教へられた通りや

つて居たが、終點へ來て『次が』と云ひかけ『逆戻りでござい！』

不見轉

不見轉藝妓座敷へ出て見ると、これは自から大通と稱する男『長唄を一つ頼まうぢやないか』『よしましやうよ益らないから』清元は什麼だね』面白くないことよ』常盤津がよからう』何だか氣がないわね』ぢや一體何を強く積りだえ』と云ふと『寝た方がいゝ事よ』大通』それもよからう！』

緋の袴

『女の書生にも随分優物が居るね、あんなのを蝦茶式部と云ふのは勿體ねえ、何とか名のつけやうがありさうなものだな』と手を拍つ

て『さうだ緋の袴!』

體裁

「電車の中で英語の本なんぞを捻くつて居る位氣障なものはないね」と一人が云ふと「ありやア體裁よ」「體裁ならもつと外にありさうなものぢやアねえか」「そこが體裁よ」

生識者

ある生識者鹿爪らしく「何でも世の中は眞面目では不可ん、浮かれるがいと云ふて、浮かれ過ぎては不可ん、眞面目のところもなければ」と云ふと、聞いて居た一人が「及ばざる事過ぎたるに似たり!」先生横手を拍つて「其處が肝要でござる」

賣ト者

學者から見れば軍人がいとやうだし、軍人から見れば文士がいとやうだし、文士から見れば實業家がよく見える、實業家から見れば官吏がいとやうに見える、さあ何になつたものだらうと云ふと、一人が「其位迷ふなら賣ト者がよからう」

火の車

貧乏人の子始終家で火の車くと云ふ詞を聞き馴れて居たが、電車焼うちの繪を見ると「爺さん、まるで家のやうだね」

(明治三十九年十月稿)



笑新二十

大地震の浮説

ある日地震嫌ひの男、今日の午後三時から五時までは大地震があると云ふ浮説を聞いて吃驚し家中の道具を庭へ出し、獨り六疊の間に坐つて時計を見詰めて居る、其中に三時が鳴り、四時が打てども地震は一向に揺らさず、もう徐々來さうなものと齒を食しぱり逃腰に構へて居る中、五時が打つ、男急に大きくなり、「さア揺るなら勝手に揺れ！」

富士の裾野

同じたかるなら美人に限ると、雲らく紅木綿の襦袢に巢を食つて居た風、徐々花見時の陽氣に釣られて、上旬ひと洒落れて見たれど、俄かの寒さに恐れ入り、再び襦袢の裏へ逃げ込んで、だんく背筋を下の方へ傳ふと、突然にぶうとやられ、これは堪らぬ、こんなところには風穴があらうとは思はなかつた、と恐恐覗いて居ると、側から親風が聲を懸けて、「其の筈ぢや、これからが富士の裾野ぢやもの！」と云つた。

無惨の類焼

某火災保險會社の受附へ一人の男來り「昨夜類焼しましたからお届け申します」と云ふ、

受附證書を見ると、生命保険の證書なれば、「これは證書が違つて居る、火災のお持ち下さい」と云へば「いや、其の類焼したのが人間だから是非此の證書で保険金をお貰ひ申したい、はい、もう無惨な類焼を遂げましたわい」と泣いた。

萬數の電話

番町の三萬三千三百三十三番と云ふ呼出しが懸つたので、交換手は驚き、「未だ萬數の電話はございませんが、一體何方へお懸りになるのですえ」と聞くと、「知れた事よ、日枝神社の山門!」

四肢算用

指を切つてまで心中を見せた女だもの、家

へ入れて、腰元にしてもやりたい、眼かけにもしてやりたいとは思ふが、生憎と、それ、手元御不如意!

鐵道國有

「鐵道國有程近來亂暴な議論もあるまい、政府は十億餘萬圓と云ふ内外の負債さへ持餘して居るのではないか、此上四億萬圓の財源を何處から見出す了簡か……や實以ての外の沙汰ちやあるまいか!」と新聞記者群りと憤慨して居る側から、「もしくそれは何の事でござりますすえ!」と無學者に聞かれ、「なに政府が今度日本中の鐵道を買上げると云ふのぢや」と云つて聞かせば無學者感心して、「成程それは困りますね、日本中の鐵道が皆東海道へ來てしまつては、第一不便でござせう!」

酒飲友達

酒飲友達と牛屋で一杯やり、家へ連れて来たまではよかつたが、主人大に酔つて其儘前後もしらす寝てしまふ、友達大に照れ、煙草をふかして、歸るにも歸られず困まつて居るところへ、細君出で來り「あら、まア、良人は寝てしまつたのでございますね、何と云ふ失禮な事でございますませう」と云へば友達頭を掻いて、「お構ひ下さるな、手前お通夜は好物で御座る」と云ふ、細君縁起でもないと眉を擡るに氣が注いたか、友達又狼狽て口を拭ぐひ「いや、これは失禮、看病の間違で御座つた」と云つた。

同情袋

同情袋が東京から行くので、饑饉地方の被

害民は大欣び、村長はまた毎日其附近を見巡つて居る、「こりやく、東京からこうして皆さんが米や金を送つて下さる、有難い事ではないか、毎日白い米が食べられると云ふものぢやから、ちと働いたが好からう」と云へば被害民はほく／＼頷きながら、「難有うございます、おかげさまで命だけはとりとめました、それでも豊年と饑饉がござりまして、働ける日と働けぬ日とがござります」と云ふ、「冥利のつきた事を云ふな、毎日缺かさず送つてやるではないか」と叱れば、被害民恐れ入つて、「はい、御尤もの儀にござります、したが昨日は一等米の豊年、今日は南京の饑饉でござりました！」

禁酒令

「未成年者禁酒問題が議會に出たさうですが、

若しあれが通過して、法律の發布を見る事になつたら、甚麽罰金になるでせう」と件に訊かれ、親父少し困つたが、「さうよな、酒なら先づ重罪で十倍だな」「それはどの位飲んだ時の事ですえ！」と問返せば、「知れた事、悪い酒で一升五十銭は高くない！」

家業難

ある客貨座敷の亭主に杯を献し「なんと世の中には種々の商賣もあるが、お主の家業程樂に儲かる商賣もあるまい」と云へば亭主苦い顔をして「なかく以て樂ではござりませぬ、いつそ此位割に合はぬ家業はなからうと心得ます」「何故々々！」「何故と申して、積つても御覽じませ、玉を仕入れる事にしまして、極の婆さんでもいけません、と申して、ぶツと小さいところでは間に合ひませぬ」と云

つた。

發明家

或人何か發明して天下を驚かさんものと種考へて居る所へ友達來り「君は何を左様考へ込んで居るのだ」「今發明をしやうと思つて居る所だ」と云ふのを聞いて、友達大に笑ひ、「はゝゝゝは君に發明が出来て堪るものか、それでは二階から……」と云ひかけて思ひ出せず「迂かり間違へて、それがなにな、二階から齒磨だ」と云へば、發明家「おいゝ二階から眼藥と云ふことは聞いて居るが、齒磨は始めてだ」と笑ふ、「それだから君はいけない、先づこれ丈の發明が出来ればいゝのだが！」

炭團の上

年頃の娘三四人炬燵にあたつて居ると爐の中から「臭い〜！」と云ふものがある。蒲團をまくつて見たらひよつとこの土面個が炭團の上で臭さうに鼻を摘んで居た。

(明治三十九年二月稿)

靴子を脱ぐと袴が行李を出る
 自然涙の露跡は上過ぎる
 盤蓋に看らし目が刺なり
 咲香坡は移民から見て鬼門なり
 悲音からですと芝居を観る夫人
 此土手へのぼるべからず鮎なり



膳味百

柔術

「君は此頃柔術に凝つて居るさうだが、全體柔術など云ふものは若いものとする事で、四十近くになつちや骨が堅くつて、うまく行かないさうぢやないか」と云へば「なアに一通り覚えればいゝのさ、俺のは身體の爲ばかりぢやアない、近頃柔術の必要があつての事さ」と答へる。「この太平の世に何の必要があるものか」とやり返すと、「君は知るまいが近

頃俺は密通に出懸た！」「やれ粹條な、一體誰とね」「あのそれ調査の未亡人！だから柔術と雖もさ、捕まつた時の要心に過ぎぬ」と云つた。

寫生

女學生汽車の中で、若りと自分の方を見ながら寫生して居る様子に、男ぐつと得意になり襟飾を直したり、背廣の皺を伸ばしたりして品をやつて居る中、寫生もしまつたので、「寫せましたか、鳥波拜見」と寫生帖を手にして見ると、隣席に居た狸婆！

葬式

女郎屋の亭主卒中で近くなり、近い寺へ葬式と云ふので、供も大勢つく、さて本堂で韻經も始まつたが、大勢なれば寺の境内に溢れ

て居る、町内の粗忽者、終局まで居た、まれす、窃と外して、寺門を出やうとすると、其處に帳つけの役をして居た妓夫、周章て、椅子を離れながら「未だ大引けまでには間がございます！」と云つた。

辯解

公園で友達と逢ふと妙な女を連れて居る、「君あの女は何者だね？」と聞くと「あれか、あれは實妹さ！」「それにしては似てないぢやないか」と云へば「それがその……他人の始り！」

空軒

隣室へ若夫婦が來たと云ふので、獨身者故爲と襖際へ蒲團を敷き耳を澄して居たが、不

圖思ひついて、空射を掻き始める。若夫婦はそれとも知らず、何か睦まじ氣に話して居たが、兩個共俄かに飛び起きて、「射が襖を開けたやうだよ！」

早合點

客年の若い藝者に的をつけ、縁側へ出て、「いゝ月だから来て御覽」と釣出し「今夜どうだね」と當つて見ると「何がです」と云ふ。「それ、例のさ」と願でしやくつて見せる。「あゝ解つた、外せつて云ふのね」ぢやアない、これさ」と手枕の形をして見せると、「そんなら早くおッしやればいゝに」

手品

天一一座の奇術へ前の晩藝者を連れて来た

男辨一杯に擴がつて見て行き、翌る晩は女房を連れて来て、今度は小さいさくなつて見て居ると、天一座員に向つて「客も随分奇術をやるよ！」

挨拶

恐ろしく堅い〜と云はれて居る男、窃り吉原へ遊びに行き、土堤まで来ると、同じ朋輩の道樂ものにばつたり出逢ひ、これはと思つたがぬからぬ顔に「いづれそんな事と思つたよ！」と云ふ、道樂者眼を圓くして、「そりやア此方で云ふ事だ！」

斬新

將を獲んと欲せば先づ馬を射よとの筆法誤つた事なく、いつも臺所から取入つては、主

人の御意に入る男、未見の家を訪れ、芥りと掃除屋と話して居るのを友達見つけ「あれは什麼云ふ法略？」と聞けば、「いつも臺所から取る／＼と云はれるから、今日は一番便所から取入る方寸、何と斬新だらう！」

遠出

馴染の女に三十圓を渡し、曙へでも遠出と洒落込まうと約したのはよかつたが、其の日になつて見ると女は来ず、獨で酔ぐのも剛腹と種々氣を採んだ末「あの中二圓ばかり返してくれ！」と手紙に書いてやつた其端へ、「せめて氣晴に牛肉でも食べる積りに候。」

出任

朝歸りに濫蛇の目の傘のぼろ／＼なのをさ

して通る、甲「さて／＼酷い傘をさしたものだ」と云へば乙「昨夜、それ……煙管の雨！」

風邪

先づ成功したら電話文は引きたい、いやそうなるよ水道も引かう、瓦斯も引きたいよ、芥りに空想に耽つて居たが、やがて正氣に歸ると、クシ、ボン！「あッ風邪を引いた！」

旅行

藝者客に對ひ「暫く見えませんでしたのね何處かへ行つてらしたの！」と訊けど、客は返事もせず黙つて居る、「ねえ、貴郎、遠くへ行つてらしたんでせう！」客未だ黙つて居る、藝者少し照れ氣味とあつて、「え、も自體！」と云へば客笑ひながら「其國／＼！」

演劇

「僕はぐっと捻つて勸進帳が出して見たい」と一人が云へば、「僕は世話を一幕出さう」「いや本郷座式のものを買つて見たい」と素人大勢寄合つて演劇の相談をして居るところへ、一人の口悪顔を出して「何をすることも勝手だが見物を什麼する！」と云つた。

無宿

ゴルキー女優を連れて亞米利加へ乗込んだまでは好かつたが、到る所不評判で、辛くも宿屋へ逃込めばこゝもまた断はられると云仕末、ゴルキー太息を吐て「嫉妬深い國だ！」

一中

去る俄大盡古稀の祝に明治の一中節を募る、文界に名ある諸先生、腦漿を搾つて作り出した唄三萬三千三百三十三篇にも達したが、中に禪を詠みこんだものが多かったので、大盡大に不審し、これを或る通人に糺すと、通人笑ひながら「大方越中と間違へて詠んだものと見える！」

接摩

「情婦を拵へるなら年上の女にしろ、屹度可愛がつてくれるに違ひない」と云はれ、年上の女を探して居ると、丁度六十五になる婆さまと出来、大に可愛がられたが、一年も経たぬに中に飽がきて手を切つたのを友達聞き、「あゝ可愛がつて居てくれたものを、何だつ

て廢したのだ」と聞くと、男真面目になつて「そりやア可愛がつてくれたに相違ないが、毎度腰を叩いてくれには閉口よ、あの位ならいつそ按摩になるわさ」と云つた。

銀貨

子供「阿父さん、僕買ひたいものがあるから五十錢銀貨を頂戴！」阿父「そりやア遣りもするが、今迄のよりか少し小さいぞ」子供「いゝや小さければ二個貰ふから！」

條虫

ある畫工條虫に苦み、いろ／＼と療治して見たが一向に出ず困まつて居たところに友達來り、「それにはいゝ療法がある、けれども僕の謎が解けないやうなら諦め給へ！」と其處

にある紙片へ「金岡の馬」と書いて歸る。畫工憂らく其の謎を解くに苦しんだが、ぼんと手を打つて早速覆盆子を買ひにやり、いゝりと尻をまくつて覆盆子を覗かせると腹の中の虫「オイ／＼俺を蛇にしちやア困る！」

合鍵

さる華族様要心深き御性に在しければ、座右の筆筒は固よりの事、お手廻りの道具へ悉く錠を下して置かれしが不圖其鍵を何處へやら置き忘れ、鼻紙一つにさへ差しつかへければ、周章しく三太夫を呼ばれ「其方合鍵を持たぬか！」

會話

高襟藝者客さへ見れば「アイ、ラブ、ユー」

を振廻はすに、馴染の男少し鼻につき「什麼だ、其位英語が話せたら、一つ奮發して洋行して見ては」と云へば、藝者眞面目な顔で、「だつて妾會話を知らないんですもの」と云つた。

物 識

甲「薄生意氣な顔をして、讀めもせぬ英字新聞などを捻くり廻はし、新體詩が什麼の、和歌が什麼のと云ふやつに限つて、淺草の觀音様も知らねえ手合さ」乙「それでも何にも知らねえよりは増だらう、お前なんざア何一つ知らねえぢやないか」甲「そりやア俺ア知らねえさ、知らねえけれどもよ、觀音様位な事は知つてるせ」乙「ぢやアあの寺の名を云つて見や」甲「寺の名位云へねえでか、淺草本願寺！」

同 情

大きな犬が二疋で交尾して居るのを、大勢の子供取巻き、棒やら草鞋やらで擲つて居るところへ、老人通りかゝり「これ〜其やうな苛い事はせぬものぢや、犬ぢやとて人間と異りはあるまいに！」と云つた。

行 燈 色

「今度遞信省で新たに出す印紙の老紅色と云ふのは、あのそれ、女學生の穿いて居る蝦茶袴と同じ色の事を云ふのださうだ」と主人細君に言つて聞かせて居るところへ、肴屋來り「今日は伊勢蝦の甘味がありますせ」と云ふと細君したり顔に、「貴郎行燈色はお嫌ひ？」

夜

逃

氣の勝つた細君、隣家で金の溜るのが癪に觸つて耐らず、什麼かして負けぬやうと一生懸命になれども及ばねば、亭主を勘めて不意と夜逃げ!

成

功

こども博覽會へ行つた人、「成程あれは成功だ」と云ふから「何か珍らしいものでもありましたか」と聞くと、「いや随分と子供を見て来た!」

酔

漢

巡査醉漢の道側に仆れて居るのを見、呼起して俵を雇はうとしたが見えず、そうかと云

つて歩行けさうにもないので、自分で背負ひ、一二町来ると、酔漢大きな聲で義太夫を初める「こらく大聲を發してはならん!」と叱れば酔漢上から「オイ左りえ〜!」

盜

人

何でも大きな家に住むに限ると、途方もない広い家を借りて住んで見たが、獨身者なれば、戸をたてるも面倒と、夜晝明け放して置くのを盗人喚ぎ出し、留守の間に入つて見たが何一つ無いのに張合抜け、「一體何處に住んでやがるのだらう!」

切

符

「歌舞伎座の「平重衡」は大層いゝ役者が揃つてますッてね、妾行つて見たいわ」と馴染

の女に強請られたが、客は一向に感せねば、
『ねえ、行かして頂戴な！』と正面から斬込む
と、客は紙入の底を掻探して居たが、『これで
往きだけは間に合ふだらう』と出したのを見
ると、電車の『復！』

紀 念

紀念繪葉書を買ひに行つて酷い目に遭ひ、
漸くの事で命丈けをとりとめて歸つて来た男、
左の頬へ大きな痣を拵らへて居る、友達見て、
『貴様其の痣は何だしたのだ！』と聞くと『こ
れは紀念の痣！』

厭 世

鈍刀詩人世の中に容れられず、淺間山の噴
火口へ身を投げて見たが死に切れねば、また

這ひ上り、今度は華嚴の瀧へ飛込まうとする
と下から岩燕が、『廢せよ、豆腐野郎！』

收 益

自著の巻頭に題して、やれ亡き父に贈ると
か、親友某に與ふとか勝手な熱を吹くのが流
行ると云ふので、ある作者、『この書によつて
得たる収益は擧げてこれを酒色の費に供す！』

湧 物

細君亭主に隠してお召縮緬の單衣を新調に
及び、筆筒の底深く秘してあるのを、亭主い
つの間にか嗅ぎ出し、亭『お前此の夏單衣を一
枚拵へたらどうだ』と鎌をかける。細『嬉しい
事、お召縮緬にしますわよ』亭『お召縮緬なら
廢すがい』細『何故く？』亭『あれならば筆

筒の底から湧くわさ！

口笛

鷹匠帽子を風にとられ、生憎それが襟の中へ落ちたので、什麼しても取れず石甍の上へ乗出して頭を叩きながら口笛を吹いた！

久米仙

久米仙女の洗濯して居るのを見、先度懲りて、落ちまいと一生懸命雲に掴まつて居ると、下から女大きな聲で、「久米さん、もう落ちてもいい頃だわ！」



笑香往來

吳服商

吳服屋の主人何か新柄を拵らへて、流行界を騒がしてやらうものと思つたが、元祿も古し、御守殿でもあるまい、と大きに心を憚まして居る處へ、番頭側から、「いつそぐつと古代に出て曲玉模様はどんなものでござりませう」と云ふ、「それは面白からう」と見本を染にやると、其日に註文、「これは芽出度い、先

きは何處だらう』と表記を見たら、人類學教室と筆太に誌してあつた。

時計商

田舎者時計屋へ來り磁石を見せてくれと云ふ、種々取り出して見せると、『狂はあるまいか』と聞く、時計ならば兎も角磁石などに狂の出る筈がないと云つて聞かせても、田舎者却々承知せず、懐中から東京全圖を出して、『どつちが北になるか、さア此上で計つて見てくださいッせえ』と云つた。

古本商

古本屋の手代、店に陳んで居る古本の上をづかづか踏んで歩いて居たが、ひよいと一つ避けて通つたから、客は不思議に思ひ『今

お前の避けて通つた其本は何かね』と聞くと手代笑ひながら、『俳諧馬の糞!』

屏風商

『金屏風程儲かるものはござりません、先づ六割の口銭は樂でござります』と云ふ、客は成程と手を拍つて、『金屏風だから口銭も折れて曲るのだらう、衝立はどうかね』と聞くと、『あれは不可ません、損が覗けます』と云つた。

藥種商

客『お前の家は毛生液の本舖ではないか、それにいつも頭の禿げた老爺を店先きへ据ゑて置くのは不都合だ、あれでは頭の剃げる藥を賣る店のやうで不可ん』と云へば、主人『いやあ

のやうな頭でもつければ直ぐ毛が生へると云ふ謎でござります、其證據には御覧じませ、後ろだけはあの通り近頃生へたのでござります！』と嘘ばツかり！

烟草商

本居宣長烟草屋の店に來り、俺の歌通りくれと云はれ、番頭少しく當惑しながら、『大概揃つて居りますが、只今のところ山櫻だけ發賣がとまつて居りますので』と斷ると、宣長大に憤れて、『あゝ世も末だ！』

理髮店

がらりと障子を開けて見ると、大勢待つて居る、客や、大層な人だ、また一廻して來よう』と云ふと、主人剃刀の手を止ながら『な

にもう直でござります』客『それでもこれ丈け待つちやないか』と云へば主人『なアに關ふことはありません、待ちたい人は待たせませア！』とまたぞりく！

菓子舗

『何かうまい物はないか』とぬツと這入つて一通菓子棚を見渡し、『さて何にしたものか時雨は冬なり、松風は季にならず、櫻餅と苺餅では春が二題になる』と考へて居るので、『それでは羊羹に遊ばしては』と云へば、『いや切れに困る』と出て行くのを見たら俳諧の宗匠。

唐物商

令嬢唐物屋へ買物に來り、店にあつたルーデサックを見ると、『これは何にするもの』と

訊くに、番頭痛み入り、「それは水流でござい
ます」と云ふ。令嬢手にとつて見て居たが、
中の粉に目がつくと、「まア綺麗な砂だこと！」

荒物商

これは庇髪の妻君新世帯と見え、荒物屋で
種々の買物をした揚句、鐵菜の尿器に目がつ
くと驚いたやうに、「大きなオヅァー、シユ、だ
事、一體甚麼人がはくの？」と聞いた。

樂器商

客「このピアノはいくらだ」商「四百圓で、先
づ先づ上等でござります」客「もう減けんのか
ね、三百五十圓位なら買つて置くが」商「什麼
いたして、結着のところ、四百圓よりはお減
き申す事が出来ませんので」と交渉數刻に及

んだが、客は少し焦れ氣味の「什麼もお前と
は調子が合はんに困る」と云つた。

漬物商

「あの漬物屋の娘と來たら美しくしいものだ、
紅藍のやうだ」と云へば、「それに引かへ、あ
の親父の汚なさは」と返す「されば老澤庵で
もあらうか」「いや、茄子の溝漬！」

金物商

「此頃は桶の箍も金、祭りの提燈懸けまでが
金になると云ふ仕末だ、何と儲かるであらう」
と云へば、金物商の主人手を振つて「金の世
の中と云ふ程には儲かりませぬ」

古衣商

娘に強請まれて古衣商を沙獲り、吾妻コー
トを安く買つて来てあてがうと娘羽織て見て
「まア、いゝ事、お引すりだわね！」

下駄商

「さやう、臺が十五錢、お鼻緒が二十五錢」
と勘定する。客の書生怪訝な顔をして見て居
たが、「僕は鼻緒をはくのぢやない！」と其儘
買はずにふい！



笑三請一

乾板

寫眞屋の小供土龍を捕へ、「さア太陽様を拜
ませてやれ！」と大騒ぎをやつて居ると、暗
室の中の乾板一つ所へ固まりながら、「桑原桑
原！」

地獄

耳を引張つて地獄を見せてやると云ひなが

ら、見えるか見えるかと云へば、『お前のやうな鬼が一疋見えた！』

火事

殿様周章しく、『火事だ〜』と火の見へ駆上り給ふに、三太夫吃驚し、急いで御後を追ひ参らせ、『何處でござります』と云へば、殿様笑ひながら、『いや無聊の餘り！』

五錢

電車賃値上げに軟化した市會議員、市民の中には無法者が居ぬとも限らぬ、何時わが家へも來襲するや知れずとて、夜の目も合はさず心配して居ると、臺所で物の響！驚いて起上るのを、細君側から『あれは鼠でござります』と云へば、『あれも敵の片割』と云ふ『何

故でござりますえ』と聞けば、『五錢均一！』

孤兒

三陸凶作地の孤兒、岡山孤兒院へ行く途中、東京へ立寄り、淺草の花屋敷へ連れられて、猿の餌へ眼がつくと『國のお榮よりいゝや』

公德

帝國圖書館の開館式にある博士が、『西洋の圖書館では書庫を開放しておいても、書籍の紛失すると云ふ憂がないから出納に面倒がない、日本はまだそれまで公德が進んで居ないから、種々の設備を要する』と云ふと、側から一人が、『丸善の二階ちやあるめえし！』

議會

英國大使の隨員本國へ歸り、『日本と云ふ國は不思議な國だ』と云ふ、『何が不思議か』と聞かれて、『それでも不思議だよ、地震があると公園で議會が開かれる國だ！』

長壽

御老人は長壽でいらつしやる、其分では百まで生きられると云ふと老人憤として、『縁起でもない事を云はつしやるな』と叱られ『全體おいくつで』と聞くと、『來年がその百だよ！』と云つた。

人見

向島の櫻ある夜上野の櫻を訪ねて、『これか

ら人見の時節になるが、いやはや懊惱いことだ！』

寫生

モデルの女モデル臺の上に立ち、大勢の生徒の中、一人美しい男を見つけ、其方へばかり視線を注いで居たがやがて寫生が済んで見ると『大體は鏡覗み！』

彼岸

彼岸詣でに出た婆様、嫁の悪口を云はうとする、一人が急に制めて、『聞えろと悪い、無線電話つてものが出来たさうだから！』

無用

兎角言質をとる男と別れ際、「どうぞお宅へ
宜敷く！」と云ふと、「宅の誰に云ふのさ」「ま
た始まつたせ、細君によろしくつてことよ」
『さうか彼れになら無用にしろ！』

北州

客は中音に北州を唄つて居ると、不見轉は
サノサで三味線の調子を合はせて居る『オイ
オイ己は北州を唄つて居るのだせ』と云ふと、
不見轉平氣な顔で、「儂はサノサを弾てるの！』

冷奴

歐洲へ行く人へ氷豆腐を贈つた書面の端へ、
『萬一印度洋邊にて融け出し候節は、適宜冷
奴にでもなされたく候』

雪隠

手が鳴るやうな音がしたので、女中客の座
敷へ行つて見たら、客は両手で尻を叩きなが
ら『雪隠は何處だね！』

清貧

道樂息子湯水の如く金を費ふに親父持てあ
まし、「さうお前のやうに持出されては堪らぬ、
財産が潰れる」と云へば息子したり顔に、「そ
れが望みです」と云ふ『何故其様な事を云ふ
のだ』と詰れば、「清貧に安んじます！』

東京

觀兵式を拜觀して歸つた赤毛布に、「全體觀
兵式は何處であつたのかえ』と聞くと、「さう

さな何處と云つて、ま、東京一面！』

疎忽

此前來た時忘れて行つた風呂敷を出して、貸す振をすると、『え、結構、ちやア拜借します』と裏を見て、『丁度いゝです、僕の姓が記してある！』

歡心

「ね、君、其所がその……古語に曰はすやだ——將を獲んとするものは、先づ其の馬を射よの格で、彼の芳子嬢を君の物に爲やうと思ふんなら、先づ其の母の歡心を得るやうに仕向けなければ、到底君の戀は成就する事は出来んぢやないか」ところがさういふ譯に行かんのぢや！』何故？可笑いぢやないか、君

の得意の交際術を以てして、老婦人の機嫌を取る事が出来んといふのは』ところがちや、彼の芳子嬢の母は未亡人ぢやから、下手をまごつくと、彼の母が令嬢より先に僕に結婚を申込むからな！』 (明治三十七年三月稿)

昨日まで閣下今日から殿になり山を迫ふ獲夫殿さへ目に入らず肩々として溜水寒からず股火也頼政は虎から先きへ籠居をし親類は忌中家で火の車角相で見えず麻髪で見えぬ月風や風や汝を如何せん厄日なり



魔尺善寸

電車

電車へ乗つて居ると一人の老爺が、「午前七時までは往復五錢と云ふのだから、午後七時過ぎも同値にしていゝ事だね」と云ふと、側に居た一人が、「それは不可ない、朝は五錢でも引合ふが、晩は、見なさい、あの通り燈火が点くから兎ても儲けは見られまい」と云つた。

安心

桑港が地震だと聞くと、阿父青くなり周章しく俵を呼んだが、父「おい〜、總領の行つてるところは何處だつたな？」と聞く。伴「兄さんの行つてるところですかえ、マーケット街と云ふ所です」と云ふと阿父眼鏡を外して「それで安心した！」

毛蟲

毛蟲徐々己の陽氣になつたと、櫻の葉から枝の方へ匂つて行くと、櫻は顔を皺めながら「え〜、擦つてえ、いゝ加減にしろ！」

無手

「無手藝者妻吉の行末を想像して見給へ、一體何になるだらう！」と云へば、「さうさな、手が無いから按摩には向かずそれかと云つて金貸も六ヶ敷からう」だからよ、僕の考へちやア、女醫師にでもならうと思ふ」女醫師！手のないものに脈のとれさうな筈がないぢやないか」なアに咬へてとるわさ」

美 術

美術家類りと繪を描いて居る側から「あゝ拙い書だ！」と云へば、「譯りもしない癖に黙つて居るものだ、僕の書が君の様な素人に譯つて耐るものか」と遣返す、友達澄したもので、「だからさ、僕のやうなものにさへ拙いと見えるのなもの、何處へ出したつて譽めるやつがあるものか！」

眞 宗

「昨日耶蘇教の説教を聞いて居たら、釋迦如来々々と荐りと云つて居た、耶蘇教に釋迦如来は可笑しいぢやないか」と云へば、一人眞面目で「其筈さね、破戒と云ふ小説を読んだら、眞宗の寺でおんがばきやアをやつて居る」

急 行

「急行の列車もいゝが、新橋から京都まで立ちづめは驚いた」と云ふと、「腰をかけてたら、さう早くは行くまい！」

隠 藝

「花柳社會の大目附黒金部長が宴席で隠藝を出して、藝妓に左様禁止の仇をとられたと云

ふが一體其甚度隠蔽を出したものだらう！
『知れた事、騒擾事件の物真似！』

要心

日頃から要心深い男に出遇ひ、「君は要心深いと云ふが、夜は何度して寝るね」と聞けば、「明けッ放し！」「鼠賊が這入つたら什麼する！」と重ねると、「されば逃げるに都合がいゝ！」

燈畫

取拂つたバナラマの跡へ田舎者二三人来てまだ残つて居る階子段を登つて行つたが、「痛田吾作、宛で真物のやうだのう！」と云へば、田吾作彼方此方を展望めながら「處まで立つから妙だよ！」

幟鯉

幟鯉大きな口を開きながら、長閑な風に吹かれて居ると、其中に日が暮れて月が出る、鯉手を拍つて、「はゝア歎をくれたさうな！」

女房

女房並にせめられて寝られねば、起上つて裸體になり、腰巻をぐるぐる廻すと、臍の下から小さな聲で、「アゝ眼が廻るゝ！」

問答

『日本で一番高い山は？』『新高山に富士山！』
『日本で一番長い川は？』とさかれてぎやふんと参り、「天の川でせう！」

無罪

甲「裁判所で無罪を宣告された程嬉しい事はなからう」と一人が云へば、乙「その位なら始めから罪を犯さないが、いゝぢやないか。」甲「何を云ふんだ、罪を犯したものが無罪になつて耐えるものか、犯さねえと云ふ事が明かになるから、そこで始めて無罪が宣告される譯だ、莫迦な事を云ひなさんな！」乙「だからよ、いつも無罪にならなけりやアいゝんだわな！」

子役

泉三郎を子役ばかりでさせやうと云ふ相談が纏まり、今年五歳になるのが三郎に當つたので阿父大に意氣込み、毎日稽古をつけて居たがある日家へ歸ると長火鉢の前で思もはず「プー！」すると伴が、「今打つた鐵砲は手元

に音あつて向ふに音なし」と云ふと阿父苦い顔をしながら、「其呼吸でやれよ！」

癡兵

癡兵一人、大威張で歩いて行く後から、「其右の足は何處で御負傷？」と云ふと、振向きもせず、「二百三高地でやられたのぢや！」「それなら、其の左の手は？」「沙河の會戦でこの通り！」と振向くを見ると、鼻の隙子が抜けて居る、「やれく、お鼻まで御負傷で！」と云へば癡兵周章で、押へながら、「これは凱旋後の負傷！」

青簾

「此青簾はこゝへ懸けやう」と旦那窓へ懸けるのを細君氣に入らず、「其處よりも縁側の方

がい、ちやありませんか」「いや此處の方がいい」いろ／＼争つて居ると、小僧仲裁に入り「それよりもお店に懸けましては？」と云ふ、旦那不思議に思ひ、「店へかけて什麼する」と云へば「親類忌中はい、でせう！」「馬鹿を云へ」と叱ると出直して、「ちやア家であつた事にします！」

(明治三十九年五月稿)

御様子がいゝわと背中どやしつけ
今日になつて金つくらうと思ひけり
義家は勿來の關で尻を拭き
業平は昔男で老翁なり
宿六は花着の袖から飯を食ひ
先づ家を警め立て、から金を借り
女房が寝た間に物とつけを讀み



涼み臺

銀座の亡者

此頃の暑さで新亡者續々地獄へ来るが中に
二三人江戸の地震で参りましたと云ふものが
ある、閻魔大王大きに不審り給ひ、「安政度の
亡者が今迄途中に迂路ついて居る筈がないこ
れには何か仔細があるだらう」と大喝し給ひ
「馬鹿め、江戸の大地震で死んだ者が、今頃
来る氣遣ひはない、東京に地震でもあつたの
か」とのたまへば、亡者恐入りて「さうでし
た、東京の地震でした」と云ふ。大王は直ぐ
見る眼、嗅ぐ鼻に指圖して調べさせ給ふに、

その氣振更になし。「夢でも見たのだらう？」と能く能く吟味すると、其の筈、銀座で納家潰の罹災者であつた。

夢に海鼠

「叔父さん、僕はどうしたものでせう毎晩のやうに死んだ阿母の夢を見る、それもいゝが小うるさい意見をされるので、めっきり瘦せました」と云ふに叔父さんも根が道樂氣のある人なれば何か禁厭はないものかと曇らく考へて居たが、「さうだ、今夜海鼠を買つて來て枕頭へおいて見ろ」と云はれ、早速其通り試みると、其晩からばったり阿母の夢を見ない、餘りの不思議さに叔父さんの家へやつて行き「什麼も不思議だ、僕は夢を食ふと云ひますが、海鼠も矢張そんな類でせうか？」と訊くと叔父さん眞面目で「なアにそんな事もない

が、お前の阿母は生前海鼠が嫌ひだつた！」

蚊の眞似

亭主夜遊びをして歸れば、女房寝て居るに聊か氣が強くなり、素裸になつて蚊帳の周圍をぐる／＼廻つて居ると、女房見兼ねて「お前さん、何をして居るのだえ」と叱る。亭主面喰ひ「穴でもあれば這入りてえ」と云へば、「蚊の眞似なんぞおしなさんなえ！」

お通夜

「自體お通夜など云ふものは、佛様のお伽をするのだから賑かにしなければ不可ない、さう／＼泣いてばかり居ては、佛様が浮かまねえ、さア浮いたり／＼」と鉢巻をして躍り出すと、亡者棺桶の中からヌツと青い手を出

したので、居合した連中膽を潰し「魔が魅したに違ひねえ、早く脇差々々」と袴合ふ、先きの男これを制して、「それだから不可ねえ、亡者に脇差と云ふ事があるものか、險呑な、それよりも三味線がい」と云つた。

不^い好^やな座敷

藝者不^い好^やな座敷から口が懸り、出^で遊^よつて見たが無^む理^りに切^き火^ひを浴^あびされ、出^でては見たもの、沁^ひ々^々不^い好^やで堪^たらず、女中へ耳語して虚電話を聞いて貰^{もら}ひ「お座敷ですから貰^{もら}つてもいいでせう」と云ふと、客は異^ちに澄^さしながら、「不^い好^やな座敷なら断^つちまふがい、せ！」

不^ふ思^し議^ぎの譯

手見せをすれば絃も可なり、顔も先づ上の

部なり、七三で二百兩と云ふ約束が纏つたまでは好^よかりしが、此^こ妓^ぎ什^じ麼^もしたものが一向に賣^うれず、抱^かへ主^し不^ふ思^し議^ぎに思^おひ、能^たく^く其^そ根^ねを洗^あつて見たら親父は探^た偵^{てい}、兄^あは巡^じ査^さ、而^{しか}も叔父さんに風俗係があつた。

品^し定^じめ

「豆腐屋の娘もいゝが、何^なだか水^み臭^くさうだ」と云ふと、「いや随^あ分^{ぶん}焼^やきもするだらう」「金物屋のは什麼だ」「あれは堅^か過^たて手^てが出^でねえ」「紙屋のは什麼だ」「薄^うッ^ッべらでいかねえ」「遊^あ屋^やのは「色が黒い」「ペンキ屋のは」「べた^くし過^する」「そんなら烟草屋のは」と訊^きかれ「あれなら先づ話^はせるが……脂^あ臭^くからう！」

紋^い所^じの註^ち文^{ぶん}

俺の代になつて一つ新らしい紋所をこさへて見たい、井桁に橋もお祖師様のやうなり、圓に桔梗も古し、と思案に餘つて紺屋へ相談に及ぶと、紺屋首を捻り、「風の丸に夢なども鳥渡無い圖でござりませう」

乞食の言草

紳士橋の袂を通らうとすると、「叱ッ叱ッ」と云ふ聲がする、振向いて見ると、一人の乞食が叱ッ叱ッと云ひながら飯盒で地面を叩いて居る、別に犬でも居ることか、失敬な乞食めよ紳士大に憤れ「馬鹿め、俺を何だと思ふ、犬ぢやあるまいし」と云へば、乞食ほんと手を拍ち、「人間なら手の中を忘れることもなからうに！」

大酒飲

忙がしいと云つては飲み、閑だと云つては飲み、金があると云つては飲み、無いと云つては飲み、飲み通しに飲んで居るのを見て、友達「今日は一つ四斗樽を据ゑたから、思さま飲んでくれ」と云へば、飲助「全體其樽をいくつ据ゑた？」

讚美歌

未だ一度も遊んだ事のない男、友達に茶屋へ連れられ、いやに取澄して居る。藝者大に氣を揉み、「何かお發しなさい、よう、何か心意氣を聞かせて下さい」とせつくと、男急に堅くなつて、「何か唄はなければならんのでございますか、では止むを得ません」と冠詞を置いて讚美歌を歌ひ初めたから、藝者面喰ひ

「チャカ／＼引掻き廻して『アーメン』ぢやーん
作ぢやーん！」

人間の利子

營養不充分と云ふ顔をしながら、せっせと稼ぎ、貯金の溜るのを何よりの樂みと明暮通帳を眺めては算盤を弾いて居る男、子など生む可からずと女房にも云ひ含めて置いたが、什麼した動機か男の子が一人産れた、『だから云はねえ事か、もう／＼離縁ものだ』と怒鳴れば、女房澄ましたもので、『さう怒らすに、利子と思つて下さいよ！』
「主」むウ、いともしもいゝとも、人間にも利子がなくッちや納まらねえ！」

電車道の兒守

電車道に沿つた兒守女、電車の運轉手や車掌には随分好い男があると、大勢停留場に突立つて品定めをして居る、『あの運轉手は色が白いのね』と一人が云へば、後のが『あの人の方が程がいゝ事よ』と混ッ返す、其中に一人素破らしい運轉手が品をやりながら、ハンドルを廻して、電車を停めると、一人の兒守眞を鳴らしながら『妾此の電車に轢かれたくなつてよ！』

家庭の圓滿

『僕の家庭と云ふものは極めて圓滿だ、見に来てくれ給へ』と言ふ、行つて見ると、大勢の子供を食卓の周圍へ集めて飯を食つて居る、『さア君、圓滿を見せてくれ』と云へば、『困るな、これが圓滿な證據だ』と茶を啜つて居る。『成程圓滿だ』と感心して家へ歸り、直ぐ

に近所の子供を寄せて、飯を食はせ、自分
茶を飲んで見たが一向益らず、急にバクツイ
て居る子供を追拂つて、「圓満程馬鹿氣たもの
はねえ！」と云ふと、子供「叔父さん、お腹も
減るだらう」

形容詞

小説家田圃の模様を書かうと、存りと形容
に苦んで居る、「杓子のやうに開いた田圃から
丁度摺鉢を伏せたやうな山の形ち、それが樺
木に似た瘤柳に囲まれて居るのも見える」と
書いた後へ「丁度味噌汁のやうに濁った流れ
へ、半片のやうな月がぼんと浮いた！」

(明治三十九年六月稿)

娯笑樂

半襟

貴夫人「妾も一つ半襟で長襦袢を拵へて見
たいと思ひます」と云ふと腰元手を振つて、
「それはお廢し遊ばせ身體中が半襟になつて
御覽じませ、それこそ襟元につく者が増ゑて
困ります！」

慾張

別子銅山全焼とある新聞を見て、疎忽者鐵
砲籠を擔いで出かけやうとする「オイ、何
處へ行くのだ」と訊くといそ／＼して「され
ば金齋を拾ひにす」

出稼

子鼠、横濱でベスト狙撃の爲め鼠を一頭十
錢で買上げると聞き「坊も濱へ出稼ぎに行か
うか」と云へば親鼠ひげを振って「そんな事を
いふぢや無い、人間に聞えるヨ」

梅雨

「今日から梅雨に入つたから皆氣をつけてな
るたけ物は日に干すやうに」と云付主人他出
して歸つて見ると八十になるお婆さんが縁側
につくねんと坐つて居る「何故こんな所にお
居でなさる風邪でもひいてはならん」と云へ
ばお婆さん憤れ返つて「私に徴が生へると不
可んと云ふて朝から嫁が此處へ据ゑた！」

大拂

某銀行烈しい取付けに遭つて居る側からつ
い其近所の神社で出した札を見ると「今明兩
日大拂ひ執行」

瀑布

華嚴の瀧病氣と聞いて裏見の瀧見舞に行き
「平常威勢のいゝ君が什麼した事だ」と云へ
ば華嚴咽喉を押へながら「昨日また藤村の骨
が支へた」

理窟

「糞尿を市營にして其後は什麼する考へたら
う餘り儲りさうな話でもなさそうだ」と云ふ
と一人が口を出して「なアに東京を畑にして

貸下げるさ！」

襦 袍

「西園寺首相が文士を招待する案内状には、
「平服にてお出で被下度候」とあつたが此
落語家を招待する時には何と書かれるだらう」
と云ふと「そればさ其時には襦袍にて差構へ
なし！」

三 度

警官窃盗に「其方は三十貫目の地蔵尊を盗
んだと云ふは不埒千萬、まだ其外に盗んだも
のがあらう真直に白状しろ」と云へば窃盗酒
落氣を出して「へい〜人目を盗んだ事も地
蔵様の顔で都合三度でござります！」

肩 書

逓信省で女子文藝を鼓吹した結果、名刺を
見ると驚いた、曰、「逓信省女子判任官兼岡秀
文學家星野董女史！」

後 場

成金黨いよ〜非境に陥り、もはや詮議も
なければ道具屋を始める、大分目星しいもの
が多いので客も相應に来る、「オイ〜其處に
ある鐵瓶は若干だえ？」と聞くと、成金濟し
たもので「それは本場だからちと高直だよ五
兩なら手を打ちませう」と云ふと客もさるも
の「いづれ後場の事としやう！」

記 者

新聞記者首相邸に文士が招待されたと聞き、
こは捨て置きすと其退出の時刻を計り、首相
邸の門前に網を張つて居ると、徐々文士が上
機嫌で歸りかける、新聞記者こゝぞと進み寄
り「もし、今日の様子をお聞かせ下され」
と云へば文士ぬからず「此大君方の招待があ
れば屹度今日の話が出る！」

種痘

いなせな阿兄種痘奨励の結果、醫師の元へ
行き「さア種ゑて下せえ！」と二の腕を突出
す、醫師「よし」と「命」と云ふ野の上
へ種ゑやうとすると、いなせ「まア待つて下
せえ、命があつての物種だ！」

雛妓

「芳町藝妓は楽しい事よ揃ひの浴衣で鮎狩に出
かけたんですつてね、妾達も負けない氣にな
つて鮎狩でもやらうぢやありませんか！」と
一人が云ふと雛妓得意さうに「家の姐さんな
んぞ此間七所がりに行つたんですつて！」

素讀

「深田の中へ真逆ま、危ふかりける事どもな
り」と云ふから太功記の素讀かと思へば、「ナ
ア三日暮里で汽車の脱線！」

檢徴

宮城縣で藝妓の檢徴が實行されたと云ふの
を聞き、東京の藝妓早くも警戒を加へた中で
一人の雛妓檢徴と云ふ事は解らぬが、什麼で
姐さん達の騒いで居る事に疎な事はなかるべ

じと箱屋へ行き「妾達にも今に檢徴ッてのが
あるんですつてね」と云へば箱屋笑ひながら、
「お前は免徴だ」と洒落る。舞妓また心配さ
うに「妾免徴だつて可厭ですわ！」

見

舞

落語家雷門助六病氣と聞いて或人見舞に行
き「ちと悪いさうだが経過はどうだね」と訊
くと助六溢い顔をして「え、變りあひまして
變りばえも仕ません！」

蝦

鯛

或る株仲買の小僧さん、「鰻針へ鯨がかつ
たと云ふのは近來珍らしい事だ」と云へば側
からお客の一人が「なにが珍らしい事がある
もので、己なんぞは始終蝦で鯛を釣る事はか

り考へて居る！」

説

論

「長野縣では親の説諭願を警察署へ出した莫
迦者があるさうぢや」と阿父話して居るのを
聞き伴舌を出して「家の阿父も御多分には漏
れぬ方だ！」

寝

惚

電車一時間餘も停電して居ると乗客退屈し
て大勢で寝てしまふ、やがて發車と云ふ間際
車掌は大きな聲で「動きまアす」乗客は大欠
伸で「お早うござい！」

大

學

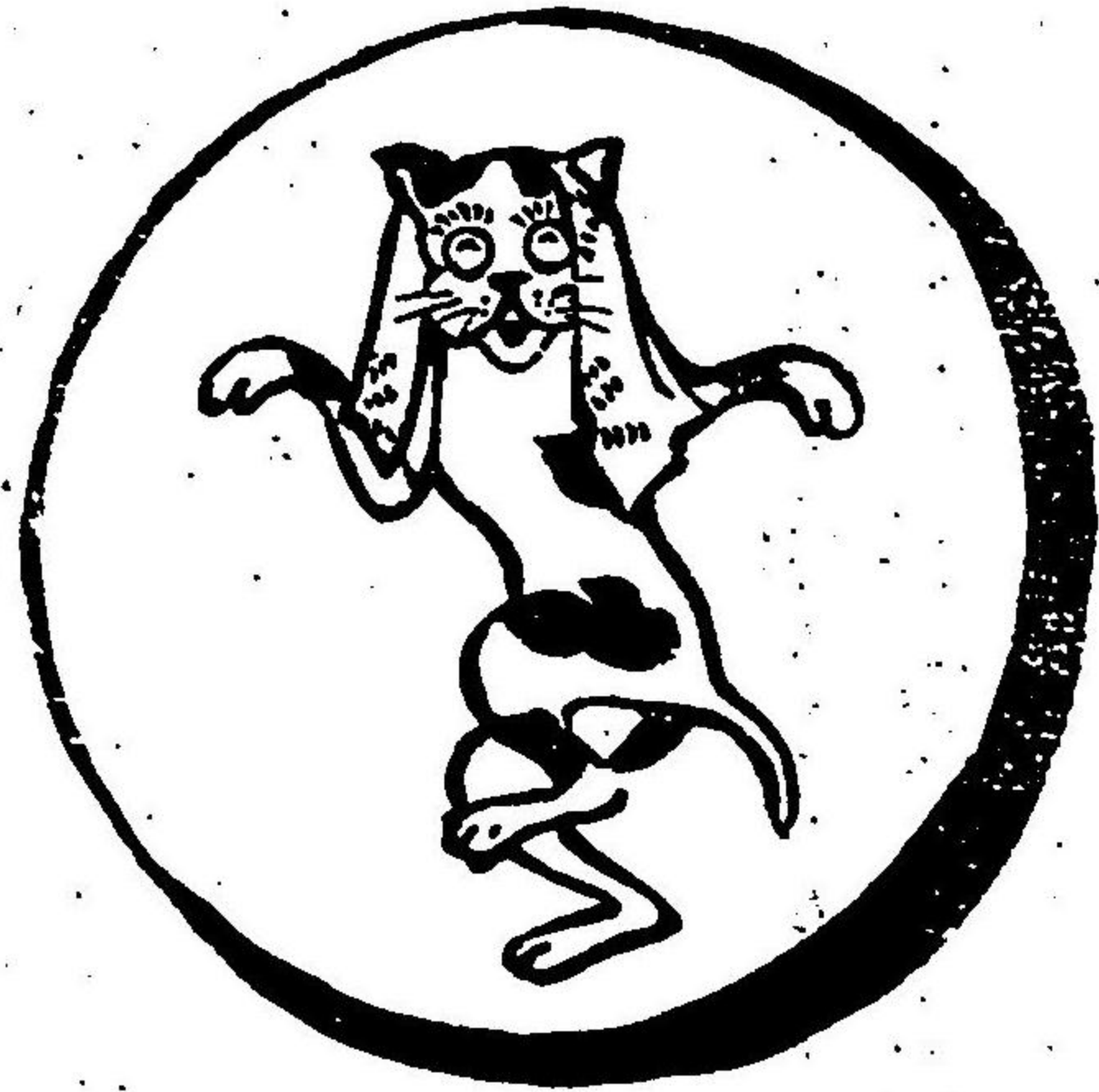
母親娘に向ひ「妾なんぞは今の娘のやうに
お轉婆の真似は出来ない、大體女大學で仕込
まれた身體だもの」と云ふと娘眞面目に「ア
ラ阿母さん妾だつて女子大學で仕込まれた身
體なんですわ！」

雨蛙

五月晴の一日久し振に日の目が拜めると蛙
蛤や蝶が喜んで居る中に不服さうな顔をして
居るやつがあるから能く見ると雨蛙！

(明治四十年六月稿)

騰るなら騰れと腹氣に米を煮ぎ
芝居見た晩が怪しい舉動なり
電車から降りると車掌同が抜ける
遠からんものは音にも聞けと交換手
もう今に來ると小哲は琴を出し



笑一品

輕石

「石の屋と云ふ藝妓屋の雛妓同志が一旦海へ
飛込んで死ぬ事が出來ず、更に匂ひ上つて襟
死したと云ふ事だが、石の屋の雛妓ならばつ
い鳥渡沈みそうなものだに！」と云へば側か
ら一人「其處が輕石だけに沈まれない！」

排日

「倫敦電報に據ると、桑港ではまたく排日風が吹き初めたと云ふぢやないか、怪しからん事だ！」と云へば、漢學者尤もらしい顔をして、「乞ふ意を安んせよ、日本若し米を排すれば即ち餓ゑ、米國日を排せば乃ち開ぢや！」

力 彌

兩國廣小路が公園になるに就いて、吉川町界隈の藝妓連や料理屋など大恐慌を起し、戸田家を借入れやうと交渉中、力彌と云ふ藝妓一人濟して「妾は吉良様にするこゝとよ」

鼠 啼

横濱の遊廓を通ると彼方でもチユウく此方でもチユウく、横に鼠啼きの音が聞えるから不思議に思つて能く考へたら、其管毎日ベス

ト液の注射執行中!

家 計

財界攪亂者豫戒令を食ふと妻女に向ひ「留守中家計だけは案さぬやう！」

天 道

書生本所の源森川で投身の美人を助け、岸へ上つて見ると、自分の衣服が無くなつて居る、書生膽を潰し「噫天道は是か非か！」

後 悔

不心得にも伯父へ決闘状をつけた男、翌る日伯父の家へやつて来たから、伯父大に落こび「前非後悔と云ふのか？」と訊くと、甥口

惜しさうに『考へて見ると伯父さんの方が強
そうだから！』

切 出

甲『三年も落着しなかつたペンと云ふ犬の裁
判も漸く此あいだ和解になつたとは芽出度い』
と云へば 乙『原被兩造大に切出しを買つて祝
つたらう！』

無 學

無學の老爺子供に向ひ『決して泳ぎにはか
りは行く事はならねえぞ』と臆めて出してや
ると子供は近所の河で散々泳ぎ、歸つて来る。
老爺『手前今日は何處へ行つた』と詰れば子供
澄した顔で『鳥渡游泳に！』 老爺『そんならい
……！』

宗 匠

甲『千家府知事が博覽會の假裝行列に加はる
と云ふ噂があるが全體何になるだらう？』 乙
『知れた事、茶の宗匠！』

與 太

博識新聞を読みながら『米國の太平洋艦隊
十六隻が太平洋へ廻航するとは不思議な譯だ』
と云ふと、與太公聞いて居て『なアに心配す
る事アねえ、戦争にあア東郷大將が居るし、
提灯行列となりやア俺と云ふものがある！』

電 話

富士山と東京との通話が自由になつたので、

登山の殿様一々御自邸へ電話を懸けられる、
『予は今二合目ぢや！』とあると晩酌中の三
太夫電話口へ出て『手前は只今三合目で御座
ります』殿様『然らば予よりも其方が一合上
手ぢや！』

河童

霖雨で水泳場至て閉、先生ツクチンと脂下
つて居るといつの間にかぼちや／＼やつて居
るものがあるから見たら河童！

鹽屋

役人鹽屋に向かひ『貴様達が餘り儲け過ぎ
るから非難がある、チト氣を付けたらよから
う』鹽屋手を揉みながら『いゝえ、そんな事
は決してござりません』と溢す、彌次馬傍か

ら『鹽だもの、あゝ溢しては儲かるまい！』

返上

阿父博覽會の審査に不満を抱き賞状を突返
して來ると敦圀くと、側から息子『序でに僕
の卒業證書も突返して來て下さい！』

尋問

閻魔大王裁入の大僧に向はせ給ひ『其方昨
夜は何處へ泊つた』と詰問ある、大僧恐れ入
り、『へえ親戚へ』と云はせも敢へず『嘘を吐
け、惡所場通ひであらう、さア舌を抜くから
覺悟しろ』と敦圀き給へば、大僧口を抑へな
がら『一枚の方だけはお助けを願ひます』

小僧

敷入小僧天下晴れて電車に乗り「喃、車掌
どん、今日こそは真個のお客様だせ」車掌笑
ひながら「平常は何だえ」と訊くと「平常は
主人のお使ひ！」

即妙

敷入として番頭吉原途で同じ店の小僧にばッ
たり出會ふ「まア、見つかつて好かつた、今
お前を探しに行く所ヨ」

株主

甲「今度出ると云ふ藝妓株式會社には株主
と云ふものが無いんださうだな」乙「はてね、
それでも會社と云ふ以上何かあるだらう」甲

「さればさ、御親類筋と云ふものがある！」

天氣

洗濯物を干すとさアツと来る、取込めば
また晴れると云ふ人焦しの天氣模様、氣の短
い細君突然洗濯物を溝へ捨て、「ア、これ
でさばくした！」

慈善

貴婦人慈善會を口實にして芝居見物と洒落
給ふを令嬢羨ましがり「阿母さま嬢にも一度
慈善といふものを見せて下さいませんか！」

密書

甲「韓國から海牙へ齎らした密書には一體甚

廢事が書いてあつたらう。」乙「されば、先づ第一に一筆京城！」

講 釋

甲「候爵伊達太夫新橋待合梶田屋に於て」と講談擬ひにやりかけると乙「おい／＼伊達は義太夫語だ、見て来たやうな嘘を吐くな」甲「だから、こうしやくサ！」

反 問

阿父「理學士でありながら今度また新たに醫學博士の稱號を授けられた方さへある何でも人は勉強が肝腎だ！」と云つて聞かすと小供「阿父さんの様に巡査で高利貸をして居るのとは何が豪いの！」

樽 砧

甲「新潟藝妓は樽の底を叩いて踊ると云ふ事だ」乙「さうか、俺の家の女房を見るが、始終飯櫃の底を叩いては箸して居る！」

小 言

朝鮮の子供、往來で礫を拾つて居ると巡査來り「コラ／＼兵器彈藥をさう無暗に拾ふ事はならん！」

氣 壓

孝主「又降りか低氣壓があると見える」女房「一體低氣壓といふのは什麼して出来るんです」孝主「何時でもお前が推へるんだ」

瓦 斯

亭主「今度東京瓦斯會社の他に千代田瓦斯會社と云ふが起ると云ふ噂だ、競争となれば自然瓦斯代も廉くなる勘定さ」妻「そして何方が明るいでせうね？」

徒 歩

徒歩主義者富士登山會を企て、飯田町から汽車へ乗ると其中の一人自分の脚に向ひ、「少しの間辛抱しろ、今に歩行かしてくれる！」と云つた。

花 火

聾者と盲目兩國の花火を見物に行き聾者は「俺は花火を見られるが其方はいかう氣の毒な」

散 歩

と云へば 盲目「いや、俺は音だけ聞かう！」

借金家の子供阿父と散歩に出掛け、アイスクリームの看板を掲げた氷屋の前を通ると子供「阿父さん、家へ能く靴を提げて喧嘩をしに来る老爺さんの家は此處なのかえ？」

同 情

電車の中で詐欺者「萬望此子に御同情下さいまし」と云ふと隣席の男「其子の同情も今日で三度目だが不思議な事にいつでも父親が遠つて居る！」

廻 遊

件「興津にしやうか、日光にしやうか、何方も廻遊列車だが、さア何處にしたものだらう？」阿父「そんなに廻遊が戀しくば外濠の電車が廉くつてよからう！」

臆病

臆病者韓國へ歸化したしと云ふ「そんな莫迦な事があるものか、あの貧弱な國へ歸化して什麼するのだ」と云へば「徴兵の心配がなからう！」

火水

兩國大花火を見に行き、船から川中へ落ちて死んだ男、三途の川で顔を知つた亡者に出逢ふ亡者「何と涼みがてら死ぬとは洒落て居るな」と云へば男「涼みどころか火水の苦しみ！」

避暑

亭主「避暑に出懸けるもいゝが何處にしやう、箱根か興津か、それとも一層家に居て晝寝と洒落やうか」細君「私はどちらでもよう御座んすが、汽車には一度乗つて見たいと思つて居ります」

お流

甲「燈籠流しは何時だらう」乙「とうにお流れになつたわ！」

氷水

甲「東京市中で此頃飲む氷の數量は平均毎日五萬貫目と云ふ事だよ」乙「さう氷を使つたら

少とは涼しくなりさうなものだね！」

亡霊

時ならぬ時分に佛壇がたがた、能く見ると阿父の亡霊ドロ〜と現はれる。伴「今時分何と思つてお出でになりましたか？」阿父「奮の于蘭盆で出直した、それに避暑券々！」

合祀

九段坂で電車の衝突に遭遇した重傷者「このまゝ死にたうございます」と云ふから、「死んで什麼する積りです一日も早く快くならねばなりません！」と云ふと、重傷者「でも、このまゝ死にましたら、場所柄だけに定めて靖國神社へ合祀される事とせう！」と云つた。

姫君

姫君海水浴から歸り給へば、その色黒く別人の如くなり給ひしに三太夫見間違へ、「え、何方様でござりましたか」と訊くと姫君「あら、好きな三太夫なこと、白い時ばかり妾ぢやなくつてよ！」

鼻塚

醫師「長野縣では出水の爲め梅毒病院が流失したと云ふが定めて負傷者もあつたらう」と云ふと僧侶「川下へ鼻塚が立つたら差詰め抽僧が鼻供養をせねばならん！」

子爵

甲「故福羽美静翁は非常な矮身だと云ふが一

體何の位丈があつたらう』乙「子爵とあるから五尺には届かなかつたらう！』

危険

甲「汽車は顛覆する、電車は衝突する、一寸も戶外へ出られたものぢやねえ」乙「家に居たつて安心がなるものか、芝の電燈騒ぎを聞いたらう？」甲「して見るといつそ死んだ方が優かも知れない！」

道楽

吉原の仁和賀へ行き流連して歸つて来た件に向ひ、阿父「貴様のやうに道楽な男も先づあるまい、お隣りの息子さんを見ろ、同じ仁和賀を見て来ても、本郷座から昨夜の中にもちやんと歸つて来なすつたぞ！」と云つた。

歸省

男學生同郷の女學生に向ひ「貴嬢が歸省なさるだらうと思つて什麼に待て居ましたらう、今年は何して歸省をなさらなかつたのです？」と云ふと女學生「貴郎が歸省なさりさへしなかつたら、妾は無論歸省いたしたのでございます！」

早婚

朝鮮で早婚禁止の詔勅が出ると、早婚者「あゝ一日も早く俺は老爺、お前は婆さんにさせたい！」

衝突

例に依つて例の通り夫婦喧嘩が初まる、大衝突の真最中に小供が歸り「ほら又お父さんとおつかさんが汽車ごっこをして居る」

類 似

町醫師検査醫に向ひながら「什麼もこの患者は類似虎烈刺のやうに思はれます」と云ふ。検査醫目を睜つて「どうして〜類似どころか、これは立派な擬似患者だ！」

焼 氷

阿父「毎日の茶受に芋ばかり食はして置くのも可哀想だ、今日は一つ氷を吞つてやらう」子供「焼いたのにしやうか、ふかしたのにしやうか」

彗 星

甲「西南戦争の時出た彗星の事を西郷星と云つたが今度は何と云ふだらう」乙「知れた事東へ見えるから東郷星！」

朗 讀

「荒れに荒れて狂ひ廻れば」と三國志を朗讀して居る側から、相場師覗き込んで「それは二百十日の事ぢやアないかね！」

洪 水

警鐘の響きと共に「洪水だ〜」と云ふ聲老爺狼狽して火の見へ駆け上り、大きな聲で、「安心しろ風上だ！」

火事

甲「瓦斯會社の火事は恰で地獄だね、下が水で二階が火になつた譯だ」と云ふと「ナアに焼豆腐」

見舞

子供出水地の叔父へ見舞状を出したが、其文句が面白い「御地出水の趣き叔父様御宅御類焼は無之候や伺ひ上候」

水害

隱居「昔し支那の禹といふ王様は水害を視察して自分の家の前を通つても這入らなかつたさうぢや」職人「ナニニわツしども、おなじでサ、幾ら這入らうたツて這入られたものぢやアこ

せえません！」

避難

水害地から避難して山の手へ住むと、子供「もう一度先のお家へ歸らうよ〜！」と云ふから親「何故坊はあんなところへ歸りたいのか！」と訊けば、子供「盃のお船へ乗れるから！」

無理

甲「四十五年の博覽會は向島がよからう」乙「水が出ては困るだらう」甲「な〜に水族館だけサ」

不漁

魚河岸に魚が皆無と云ふので棒手振ぶらりと浅草へ遊びに行き、水族館へ入つて見て「チョッ不漁どころの騒ぎかえ！」

七草

水害で百花園の七草目茶〜になつて居るに園丁氣を揉み、せめて泥でも落してやらうと、如露の水を颯と懸ける、七草吃驚して、「また出水だ」

月待

甲「月待にはどうだつた月が見えたか」と云へば 乙「月の出ない前に歸つて来てしまつた」
甲「それちやア行つた甲斐がねえ、何の爲の月待だ」と詰ると 乙「さう云ひなさんな、掛星を名代に拜んで置いた」

臺灣熱

富豪の隠居出入の頭領に「作も此頃妙な病氣に罹つて困り切る」と云へば 頭「だつてツイ昨夜も吉原の成入幡の前で臺灣女郎を冷やかして居らッしやいましたか」と怪訝な顔をする隠居「だから困るので、臺灣熱に罹つちやア手の着けやうがない！」

低氣壓

息子「家の阿父さん位低氣壓の間屋もありますまいね」と云ふと阿父大に怒り「當然だ〜と壘を無性に叩くから、息子能く見ると成程琉球に代つて居た。」

彩票

伴阿父に向ひ「だから謂はない事ぢや無い
偽せ物の彩票なんか買つて益らない」阿父フ
ンと澄まして「真物なら疾うに捕まるとこ
ろだ。」

初秋

米相場師醫者に向ひ「二百二十日もどうや
ら無事に抜けたやうでござります」と云へば
醫者心得顔に「風が抜けたら熱も追々さめま
せう！」

紋附

學習院女子部の規則が改まつたので貴夫人
令嬢に向ひ「さア、今日から學校の御規

則に従つて木綿の紋附を着てお出なさい」と
云へば令嬢夫人の顔を見て、「靴の紋は何だ
ませう」

名産博覽會

甲「大阪築港俱樂部で今度名産博覽會をやる
と云ふから一つ出品してやらうと思ふ」乙「全
體何處の名産を出品する氣だ」甲「無論東京さ」
乙「ふーん、して其出品物は！」甲「第一に火
事、第二に喧嘩！」

ロセツタ丸

「さアこれで動く氣遣なし、船も此位座礁す
れば確かなものだ」と芽出度がつて居る船が
あるから、能見ると其等ロセツタ丸！」

お化粧俱樂部

俱樂部員甲「化粧法によつては貧相を福相に見せ得られる」同乙「結局が金を借りる面が返す面になればい、譯だ！」

三太夫

新華族の執事妙に容體振るに出入の商人、
「其方の御主人こそ今度華族になられたもの、お前は矢張り執事ぢやアないか、何もさう勿體振る事はない」と云へば執事「莫迦にするな、今日からは三太夫だ！」

地震

素破こそ地震と女房飛出さうとするのを亭主制めながら「今出ては危ない、潰れてから

にしる！」

最高級

細君「韓國統監の月給はお手當も入れて一年に二萬七千圓で、一ヶ月に二千二百五十圓、一日に七十五圓、一時間に三圓十二錢五厘、一分間に五錢二厘に當るんだつてね」下婢「まアそんなに戴いたら朝鮮へなんぞ被入る事はないでせうにね！」

無邪氣

女中「オヤ、電燈が消えちやつた、什麼したらいんだらう」と云ふと側から雑妓「姐さん、油が断れたんぢやアなくつて！」

長夜と短日

湯治客按摩に向ひ「大分に夜が長うなつた」と云へば按摩「其故爲か日が短いと云ふお客様もござりますが、手前悲しい事に未だどちらも見え事はござりませぬ」

電車の中

車掌「何卒前の方へお詰め被下い」巡警手「成るべく後の方へお詰めを願ひます」客「これでは真ん中がひしやげる！」

祝意

横濱の風俗係某統監府へ榮轉と云ふ噂を聞くと、同市の暖味屋は競つて赤飯を炊いて祝つたが、不思議な事には鹽がついて居ないか

ら「何故また赤飯に鹽をつけないのだ」と訊いたら、返事がいゝ「鹽だけは戸外へ蒔きます！」

玉代値上

神明藝妓玉代の値上げをしやうと神明様へ伺ひを立てると、神様「玉代の値上げも可からうが、ちと賽銭の方も値上げを頼む！」

俵藤太

神田の大祭に米俵を奉納しやうと内陣へ擔入れると、將門の靈立現はれ、「俵藤太は願下げだ！」

正札附

糊工場出火の際小使某狼狽の餘り二階窓か

ら飛降り人事不省となり大騒ぎの處へ醫師が馳つけると、彌次馬「先生どうでせう、蘇生致しませうか」と訊く醫師脈を診て「大丈夫、正札附！」

泥をつかむ

梅ヶ谷地方巡業の途次、乗居たる人力車其重量にや堪へざりけん、メリ／＼と破壊れ、梅ヶ谷は見事に深田の中へ投出されたが、起き上ると苦い顔して「砂を掴んだ事は二三度あるが泥を掴んだのは今日が初めて！」

老車夫

老車夫俵に向ひ「俺もこれ満五十五歳に手が届いて居るから、明日にも鑑札を納めやうと思つて居る、さうするとお前もまた學校を

退つて貰はねえぢやならねえ」と云ふと俵平氣な顔で、「ぢやア俺が人車を挽くから阿父さんは學校へ上んねえ！」

怪談

夜長の徒然に怪談をやらうと大勢集り抽籤で怪談を始めると真先きの一人が「あるところ一人の氷屋があつたと思ひ給へ」と冠詞を置いたまでは可かつたが「それが君急に芋屋に化けた！」

(明治四十年九月稿)

脂髪枝に亂れて雨が漏り
節穴を覗いて亭主口惜しがり
待合の女將座敷が氣にかゝる
お馴染はないかと顔へ穴を明け
命だけよけてと種痘六ヶ敷い

◎頓智利帳

十八大通とか見巧者とか云はれる程の不幸で、さうなつては、どんな面白芝居を見て、初代の誰に比べては藝が重過ぎるとか、科白がそぐはぬとか、何とか、彼とか離舞がついて来て、幕開きから欠伸とまでは行かなくとも、先づ先づと合點の行く芝居はあるまいが、其處へ行くのと拙者の如き素人見物、誰が何をして居るやら、何の下題で什麼云ふ筋なのやら、隨張譯られば、釣枝が上から下るのも面白ければ、舞臺の廻るのまでが不思議に見え、四天の引抜きにでもなつて見給へ、成田屋！成田屋！と幕を裏める。側から大通が、「もし、成田屋はもうこの世に居ませんぜー」「さうですか、そんなら誰にしませう」「成駒屋は何で？」と云ふやうな羽目になつて、葉辨、爺どころか、「酒し二三本はいよ、返りには茶屋へ寄つて五圓紙幣の一枚も奮發まう」と云ふ事になるのだが、何とこの位無邪氣な者はあるまいと思ふ。そこで今此處へ寄かうと云ふのは、其無邪氣さがズバ抜け、結局滑稽に落ちた見物の穴探し、若し似た事もあるものだと感ずつた人があれば、それで我輩萬歳と云ふものさ。

今日の芝居で死絶えた

素人見物の旗頭某ある日誘はれて芝居へ行つた。歸つて来て火鉢の前へ坐るところを、女房側から、「今日は面白かつて？」「うむ可也面白かつた！」「下題は何でしたえ？」「はて、何と云ふ下題かつい聞洩した！」「ホ、ホ、下題を知らないで芝居を見るなんて……世話物でしたか」「何だか知らないが、泣いたり、笑つたり、種々な事をして見せたよ」と云ふと、「昔の風でしたか、今のものでしたか、その位譯りさうなものですわね」「昔々、昔に違ひない。社杯を着て大小を差して居たからな。社杯で大小と云ふと、按摩が柱曆を讀んで居ると云ふ體裁だが」「で、どんな事を致しましたか」「一番始めが何だかお宮のところ、士が大勢並んで居るところへ、一人の女が兜を持ち

出すと云ふ奴さ」「譯りました」「譯つたかえ、俺は考へたよ、大名が零落れて質屋を始めたので、其女の夫と云ふのが兜を質に入れやうとする、番頭は價が折合はぬと云つたやうなところだらうと」「ホ、ホ、飛だト、チリですね、あれは忠臣蔵の兜あらためですわ、ちやア貴郎は忠臣蔵の通しを見てゐらしたのよ、師直は誰がなつて」「知らねえ、それを知つてる位なら、俺も劇通になれるさ」「随分いゝ役者があるから面白かつたでせうね。判官は誰がして、あの、それ腹を切る人があるでせう、三寶を前へ置いて、かう肌を脱いで、袴の裾をはねて………迎かつた由良の助ッ！」

「おい、變な事を云ひなさんな、何と云ふ役者だか知らねえがそんなのが一人居たつてよ」「俺も明日行つて見たいわね、いゝでせう、やつて頂戴な、俺是非忠臣蔵が見たいの！」

と徐々強請にかゝつたが、亭主先生腕を組んで考へて居る。

「ね、いゝでせう、やつて頂戴よ、貴郎ばかりいらしつて、俺に見せないつて、そんな貴郎、よ、僕行きますわ」「駄目だ、廢にしな、もう明日あるかないか譯らないよ」「おやもう今日で樂なのですか？」「樂か苦か知らねえが、大抵いゝ役者は今日皆死んでしまつた」と云つた。

吹き出すやうな愁歎場

高士間に三人連れ、一人は又我黨のこれもまた随分ズバ抜けた方の一人なりと知る可し。芝居はぐつと濫い條で、立廻りなど更になし。ズバ抜先生序幕から退屈の欠伸を咬締めて居たが、愁歎場のしんみりとして棧敷と云はず士間と云はず啼嘘の聲が始まると、先生蘇生つたやうに、いッ、吹出すから、「欠伸はか

りして居たものが此愁歎場になつて笑ふと云ふ法があるものか、人の見る目も耻かしいわ、貴様も江戸で生れた男なら、かう云ふところを見て涙の一つも零されさうなものぢやないか」と云へば、先生益々笑聲に入り、「俺りやこんな可笑しい事はないよ、芝居と云ふものを始めて見たが、全く面白いものだな」かう云ふ場を見ちやア芝居を見ずに居られねえのだ、俺ア身につまされて、何だか悲しくつてならねえ」と一人は涙を拭く。

「ハ、ハ、ハ、何が悲しい事があるものか、俺ア、可笑しくつて堪らねえのよ。一寸見ても、貴様達は舞臺の方ばかり見てるから悲しいんだが、向ふの鶉を見ろ餘程面白い！」

と云ふので、二人は其指す方を見ると、口髯のもちやくと生へた大の男が二人まで巻煙草を咬へて泣いて居る其顔の可笑しさ。二人も思はず吹出すと、「お前達も矢張りあ

の通りの顔をしたせ。俳優の方から見たら、何方が芝居をしてるか譯らねえ事になるだらう！」

飛んだお芝居

これは拙者の懺悔だから聞いてくれ給へ。いつやら川上が初めてお伽芝居を本郷座でやつた時に、大人は壹圓五拾錢と云ふ價に就いて、行つて見たいは山々だが、少したぢらいで居ると、「さう云ふ事なら世話役と云ふ名義で來給へ、さすれば子供並に十錢で見せて上げる」と云ふ事になつたので、さア俺も行く、我も行く、忽ち同志五六人、指定の茶屋を間違へて、他の茶屋へやつて行つた。先づお二階へと云はれて、不圖見ると、階子の下に並べた朱鼻緒の麻裏草履、こいつ異をやるわい、西洋料理式にこれをはいて上れと云ふ謎

と覺つたから、直ぐに突かけて、ばたん、二階の口まで来ると、下から女中が追かけて来て、「滅相な事なされますな、そのお草履は芝居通ひのござります。どうぞお脱ぎ遊ばして」と云はれて吃驚！はいくとまた逆戻ると、階子段へは上り草履に下り草履、足跡があり、とついたものさ。上り龍に下り龍ならまだ目出度いがこれではどうやら芝居にならず、平謝りにあやまつて、悠々と棧敷に送られ、「いやどうも十錢では安いものさ、見給へ、この蒲團、オヤ菓子もある、こんな芝居なら年中見たいものぢやないか」など、太平樂を云つて居る。驚いたのは下の世話役連中で、「オヤ、あの手合は什麼したと云ふのだらう、棧敷で悠々と見物なぞは借越ぢやないか」など、議論百出。此方はそんな事にお關ひなし、大威張で序幕も見、やがて三幕目の幕へ来ると、茶屋の手代らしいやつが来て、

「今こゝへお客様が見へますから、除いて貰ひませうかえ！」疵もつ足の「素破大變！」とばかり其處を出ると直ぐに茶屋へ歸つて一緒に括つてある下駄を引扱ひの、一散に送り……三重！

舞臺へ賽錢

奥州から来た客に東京の芝居も學問の爲め見て行き給へ、それには歌舞伎座がよからうと、早速連れて行き、一日見物して、歸つて来たが、其客は一向浮かぬ顔をして居るので、「何故さう浮かぬ顔をして居られる、東京の芝居は有繋に立派でせう」と云ふと、「左様立派ですがな」「何かお氣に召さぬ事でもありませんかえ」「いや結構でござりました。あんな結構な芝居は見たことがござせんがな、只一つ俺等の田舎にねえ事がござすでな、外でもねえで

がすが、惜い事に義経公が出ねえ、俺また義経公が出たら出たらと思つて、かうして賽銭を握つてたが、終局まで出すじめへで、気が抜けたやうになつたでがす』と手を開けて見せると、文久銀が一つ！『東京で義経公が出れば、どうしても五銭がものはある、それちや家來の辨慶も出ますまい』と云つて笑つた。

壯士劇と舊俳優

壯士劇を始めて見た人、若りに伊井、高田などの藝を褒め『いや芝居は壯士芝居に限る、何を云つても舊俳優の及ぶところぢやない。あゝ壯士劇、壯士劇！、これから劇界は伊井高田に取られてしまふだらう』と寝言にも明暮云つて居る『馬鹿を云へ、貴様は未だ觀察眼が乏しいのだ、壯士劇がなんぼよくやると

云つたところがとても舊俳優に敵ふものか、其證據には舞踏も満足に出来るやつは居ねえ、振事が出来てこそ俳優だ』と混つ返すと、『いやさうでない、舞踏や振事は習へば出来るが、あの條を吞込んでやるところが千兩だ。團、菊、左が死んだ跡の舊俳優は見られた態ぢやアない、まア貴様もそんな舊派な事を云はずに、ちと本郷座でも覗いて来い』と云ふ。

『そんなら貴様は壯士劇の何處がいゝ』『何處がいゝと云つて、何しろ寫實だ、何でも本當の通りやるのだ、本當の通りやらなければ芝居でねえからな』『そんなら何處が本當の通りなのだ』『假令ばさ、俺が今かうしてお前に話しをして居るやうな事をやるのよ』『それが何故また面白いね』『だつて見物してる俺が芝居をして居るのか、芝居をして居る俳優が見物して居るのか、其處が譯らなくなる事があるから面白いぢやないか！』と云つた。

作者もらく芝居もらく

ある大通が脚本を書いて、これを劇に上したがいや大好評で、其條は毎日の新聞へ出るやうになつた。ある日我黨の一人この大通を訪たが、「君は劇を書いたと云ふがさうかえ？」
 「迂遠かな、君は定めし讀んでくれたらうと思つて居た」
 「始め一二回は讀んでも見たがね、何だか面白くないから廢してしまつたよ」
 「これは御挨拶だ、あの位骨を折つたものを讀まんとは酷いな、芝居の方は毎日客止めの妻だ」
 「そんなに面白いかえ」
 「面白いつて原作が原作だからな、それに一寸變つて居るから人氣が立つたのさ」
 「然し随分骨が折れたらうね」
 「折れたの折れないの、何しろ原作者の意を其儘日本の舞臺に直さうと云ふのだから苦心經營さ」
 「さうかえ、だから當つたのだ、もう

占めたね、かう當るやうになれば作者も樂、芝居も樂と云ふものだ」と煽動すると、先生氣色をかへて膝を立直したが「オイ、く下らない事を云ふまいせ、俺の樂はいゝが、未だ返り初日も見ねえうちに樂になつて堪るものか！」

幕のたてつけ

本郷座で高田がフランチエスカを演つた時、二番目に鏡花氏の高野聖を出した。これは同氏の小説深沙大王の筈であつたのだが、座の都合で高野聖に描きかへたと云ふ談であつた。何はさておき見物は道具の立派さに驚かされて、高田の巧者な所へ感すつてしまつたが、フランチエスカの幽霊塔の場が幕になつて、高野聖へかゝつたところで、現在の幽霊塔の場で殺された藤澤の房の助と、兒島の續江と

が、丁度また其處に落合つて一人は妖婦、一人は所化と云ふので、科白も時代から云つて格別フランチェスカの場と違はなかつた。さてこの幕へ來ると背景の見事さ、どうしてあんな大道具が此舞臺へ使はれるかと思はれる程のものであつたが、我黨組の面々には随分此幕が變つて居ると心づかぬ者があつたらしい。現に僕の居た直ぐ隣りに三人ばかり女武者が控へて居たづけが、妖婦と所化とが鳥渡味な科があつて、お猿がびよん／＼とでんぐりかへし、チョンと幕になると、かう云つた。「先刻の房の助と織江とがあゝの幽霊塔で殺され損なつて、一人は坊さんになる。一人は後を追かけて山奥へ這入つたのを、あのそら異人さんがお猿に化けて邪魔をするのでさアね」と獨斷の推量も無理とは思はれなかつたが、さて其次の幕へ來て、妖婦が馬へ補襦を着せる段になると「あの馬はね、房の助の兄さん

が化けたのよ、だから御覽なさい、あの女を見ると動きやアしないわ」芝居もかう見られた日には堪つたものぢやアない。

いつはりの聲色

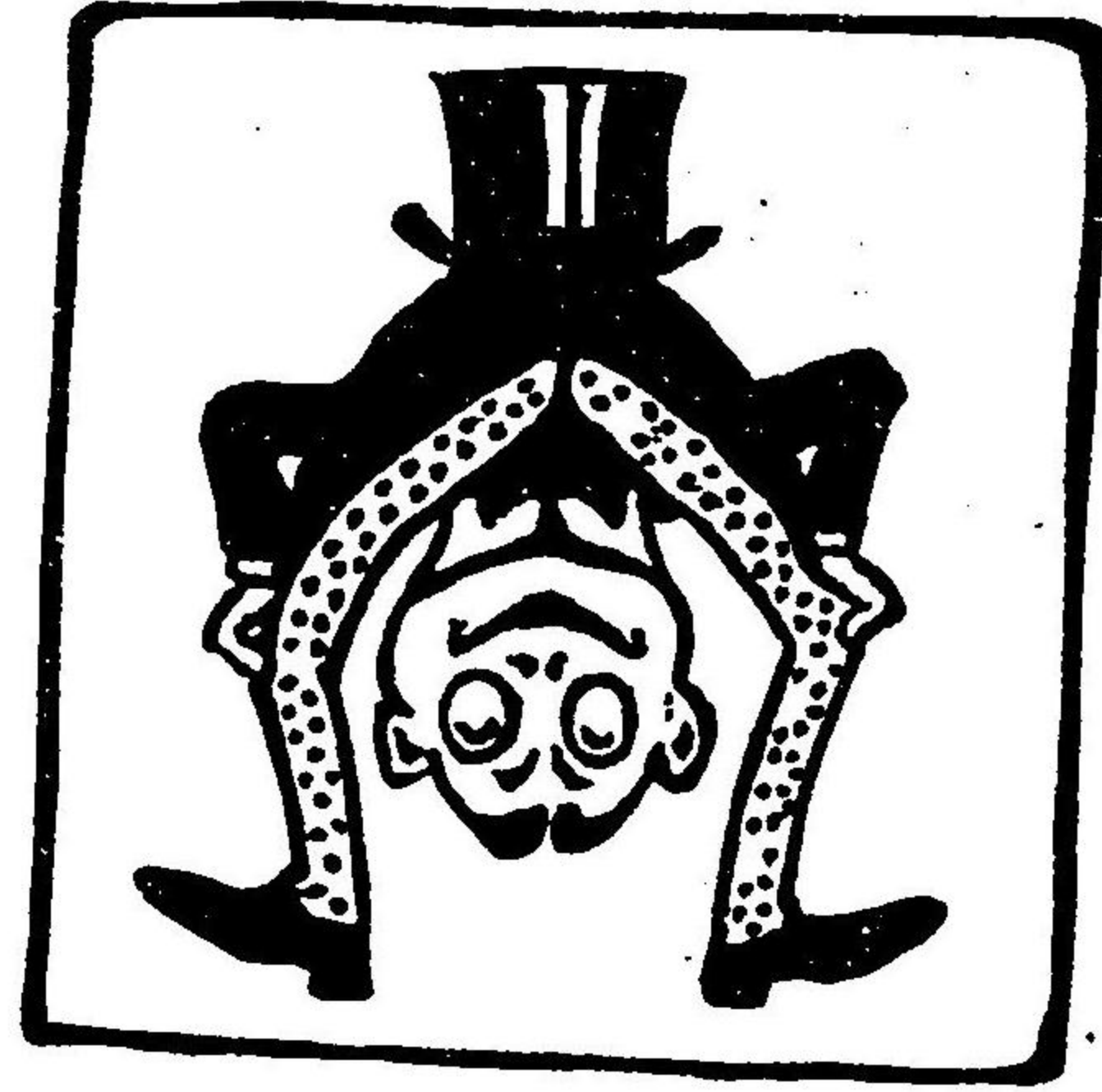
未だ一度も芝居を見たことのないと云ふ男ある夜近所の寄席で團十郎の聲色を聴き、成程日本一の團十郎程あつて、白まで何處やら重味がある。いつか一度團十郎の芝居を見に行かうと心掛けては居たがそれなりけりで、つい行きもしなかつた。ところで其夏避暑と云ふので湘南の方へ遊びに行き、茅ヶ崎の海邊を歩いて居ると、一人の老翁がやつて來て、種々と話しかけた。そこで互に名のり合ふ事になつて見ると、「いや私が堀越秀で、いやなに市川團十郎と申すのは手前で」と云はれて見れば寫眞や一枚繪で始終お目にかゝつ

て居るお馴染の大眼珠、「ア、さうでしたか」と別れはしたものの、其話振りは尋常一様、声色使のとは雲泥の相違なので「や、恐れ入つたものだ、声色使と云ふものはあつても嘘をやるものか知らん」、蓋し未だ舞臺の白を聞いたことがなかつたからさ！

(明治三十九年二月稿)

油さし三度来た後樂書し奥様と云はれて妙にかたづけ新婦の夫婦表面は他人なり赤飯をおはぐる滑へぶちまけるなにそんな事でもないと思はれて腰元は炬燵の側を危ながら此の親にして此子あらうと思はれず

成金黨の目算



一筆啓笑

植花一日の榮とは誠に此事であらう、成金黨株の暴落と共に殿様から一足飛の裏店住ひ、いかにもして盛返し、せめては昔日の俸だに見たいものと、種々苦心して居る最中、戸外の方で『あがつた〜〜！』と云ふ聲「占めた！』と飛出して見ると、裏の河岸へ土左衛門が上つた。

取付と大拂

銀行が取付に遭ひ、大雑踏を極めて居ると、其處へ木棉羽織に小倉袴と云ふ拵への男來り、悠々煙草を吸つて居るので、行員見咎め、「貴郎は取付けにお出でなされましたか？」と云ふと、男風呂敷から神符を出して、「七月の大祓でございます！」と云ふ。行員すかさず、「大拂なら、當銀行で只今執行中に御座ります！」

公債か後妻か

「先づ公債は九十三圓で手放して八十六七圓で買入れると云ふが原則のやうになつて居ります！」相場通話して居る側に一人雙の田舎者早耳に聞達へたか、「俺の後妻は三十で來て

四十五歳でおッ死に申した！」

ロセツタホテル

洋行歸りの紳士一タロセツタホテルを訪れ「先づ泊つて浮旅宿の味を御覽なされ」と云ふ勧めに任せ、一泊したまでは好かつたが、翌る朝未明に起きると下婢に向ひ、「オイ、まだシャートルは見えんか」と云ふと下婢済したもので「はいオハヨ、なら直きでござります！」

雨しよぼの二十萬圓

甲「雨しよぼで二十萬圓の金を拵へた小糸は實際豪いものだ」と云ふと、乙「そんなら小糸がお天気師だつたら大したものだらう！」と云ふ。甲「いや雨しよぼだから二十萬圓の金を

拜んで死ねたやうなもの、もしあれがお天
氣師だつたら日の目も拜まずに死んだらう！」

人の一心

阿父郵船株を幾枚も疊へ列べて一日見詰めて居るから作不思議に思ひ、「阿父さんは今朝から郵船株と睨めッこをなすつて被入るが全體什麼した事でござります、氣でもお狂ひなされたのではないかと苦心配致して居ります」と云へば阿父兵面々な顔して「郵船株も今のところ百圓まで漕ぎ上げた、けれども未だ俺の買った元價にならんから、かうして睨んで居る中には屹度上るだらうと思ふのだ、人の一心程恐ろしいものはない！」と云つた。

全體何を賣る

「仁丹の賣探し、大學眼藥の常物、快消丸の字探しなど、近來福引のやうな事が大層流行するが、何か一つ奇抜な事はあるまいか」と主人の訊ね、番頭腕拱いて考へたがぼんと手を拍つて、「好い事がござります、お店の商品を無代抽籤で配つと云ふ趣向は如何でござりませう！」と云へば、主人も釣込まれて、「成程それは名案だが……待ちなよ、全體何を賣る事になるだらうの？」

事業繰延

病氣で云ふと先づ癆症と云つたやつが肺結核さね、熱病と云ふのがチブスと云ふ名に變つて、女大學が女子大學になる、大名が華族、お布令が布達、証が法律と萬事六ヶ敷く云はないちやア收りがつかぬと見えて、此間ある紺屋の前を通つたら、かう書いて貼つてあつ

た、曰くさ、「三日間事業繰延！」

無病息災

「地震には耐震家屋あり、火事は自火の外は焼つゝなし、盗賊は戸締りが嚴重なれば容易に這入れず、雷は避雷針が隙間もなく立つてあるから、これも先づ安心、こんな住好い別荘も先づあるまい」と自慢して居る中、主人はッくり死ぬ。誰も住人がなくなると、近處に居る百姓、「この家はこれではア無病息災が一つ増へた！」

消費組合

紳商の伴放蕩にて金を湯水と遣ひ捨てるに阿父持て餘し、「貴様は全體この家を何と心得て居る、大きな聲では云はれぬが多少脱税し

てまで財産を肥やさうと心懸けねばならぬのに、貴様の行は何だした事だ」と云へば、伴さしッたりと身を反して「さればこそ消費組合！」

時効の正物

骨董屋偽物を紳士に掴ませ、たんまりと儲けたまでは好かつたが、紳士商法の手違ひから諸道具をぼつゝ賣り初め、先きの骨董屋を呼んで、「これはお前から買受けた品だが若干なら引取る！」と云ふ、骨董屋膽を潰し、「これは若干のものでござりませぬ、先づ三兩ならお引受け致しませう」紳「おいゝ莫迦を云ふては不可ん、貴様はこれを百圓に賣りつけて行つたではないか」と極めつけると骨董屋愈々恐れ入り、「成程あの時は正物でござりましたが、かう時効にかゝりましては偽

物同様でござります」

東京土産

東京見物から歸つた村の物識に、百姓東京の模様を聞いて居る百「東京にはハア鍛冶橋の橋があつて、兜町と云ふ町が直ぐ側にあるつてね、途方もねえ堅え町もあるものだね」物「いやそればかりでない鍛冶橋と云ふ橋があつて、つい其側に大工町と云ふ重寶な所もある、只残念なは親父橋が有つて俵橋のない事ぢや！」

妙な病名

「イ、シ、ウ、ツ、ノ、ケ、セ、ヅ、ボ、ン」と云ふ問題を出して、この中から病名を選び出せと懸賞で暮つて居るのが今治水。譯はな

いね、先づ頭痛(ツツウ) 神經痛(シンケイ ツウ)、逆上(ノボセ)と書いて出せばそれで可いのさ」と云つて居ると、側から一人、「いやまだある、坊主(ボウヅ)もあれば、火消壺(ケシツポ)もある」

不良ラムネ

茶店へ憩んで、「このラムネは新しいかね？」と訊くと、茶店の婆したり顔に、「え、え、新らしい御座います」と云ふ、抜いて見ると泡も立たぬに、「おい、これは古い」と云へば、婆「でも、今年の春仕入れたばかりで御座います」

藪入小僧

藪入小僧飛んだところへ藪入の型朝岡庵堂

の前を通ると、閻魔大王「昨夜は何處へ泊つた？」とお尋ね、小僧恐れ入り「へい親類へ泊りました」と云ふと大王敦圀き給ひ、「不埒者め、悪所場へ参つたものであらう、其舌を預けて行け」と云はれ、小僧吃驚して「舌ならば手前より對妓の方が餘計に御座ります、いづれ其中お届け致します！」

負惜しみ

「縫目なしの蚊帳へ寝て見たら、寝心がいゝのでつい寝坊をやらかした」と云へば、負惜みの強い男「俺も昨夜釣手なしの蚊帳へ寝て見たが、莫迦に寝心がよかつた！」

酔醒し

雨蛙芭蕉の葉へ乗つて風に吹かれて居ると

ころへ蜻蛉来り、「蛙さん、何をして居るのだ」と訊くと、蛙澄した顔で、「ナアに酔醒し！」

湯遇

箱根の温泉宿組合で避暑の先着者は優遇すると云ふ廣告を見早速出懸けて見ると何の變哲もなし、「一體何處が優遇だ」と聞けば、番頭頭を搔て「せめてお湯でも熱く致しませう！」と云つた。

常陸山の展墓

常陸山展墓の爲めに水戸へ歸り、先祖代々の墓へ詣で、いざ歸らうとすると、墓の下から先祖の聲で、「今少し地響きのせぬやうに頼む！」

大井川

大井川の築堤が破壊して汽車不通と云ふ騒ぎを聞くと、雲助會の幹事直ぐに連臺を跳へ、川越と云ふ趣向は好かつたが、さア河まで来て見ると到底渡れさうもない、矢鱈に「河止めちやく」と怒鳴つて居るところへ「渡して下され」と來たのを見ると、朝顔賣!

明
暗

石油が騰ると云ふので、急に行燈にして見たが什麼も暗い、「え、もういつその事灯なしが優だ」と暗黒に坐りながら「これで明るくなつた!」

汽車賣

汽車の衝突が頻々として聞えるに、機械な汽車賣、前箱へ氣附薬を仕入れ、「え、鉛麵包に正宗……膏薬に糊帶!」と呼んで歩いた。

近
火

神奈川の火事に近火御禮の廣告、恐ろしい大きな屋敷もあるものと、能く見たら、東京府! 成程近火に相違ない。

無痛治療

痔疾無痛治療とあるに早速治療を乞ふと、却々痛い、「これでは無痛治療どころか、痛くて堪りませぬ」と云へば、醫師苦い顔をして「貴郎はちと神経が強すぎるて!」

ベスト天気

「御用心なされませ、ベストが参りました」と云ふと、周章てた隠居突然戸外へ飛出して、「成程ベストのやうなお天気でございますなア！」

經濟

岐阜提灯を買つて来て下げて見ると却々涼しい、第一洋燈を點けずに済むと眺めて居る中に、風が来てはッたり消える、「いよく經濟！」

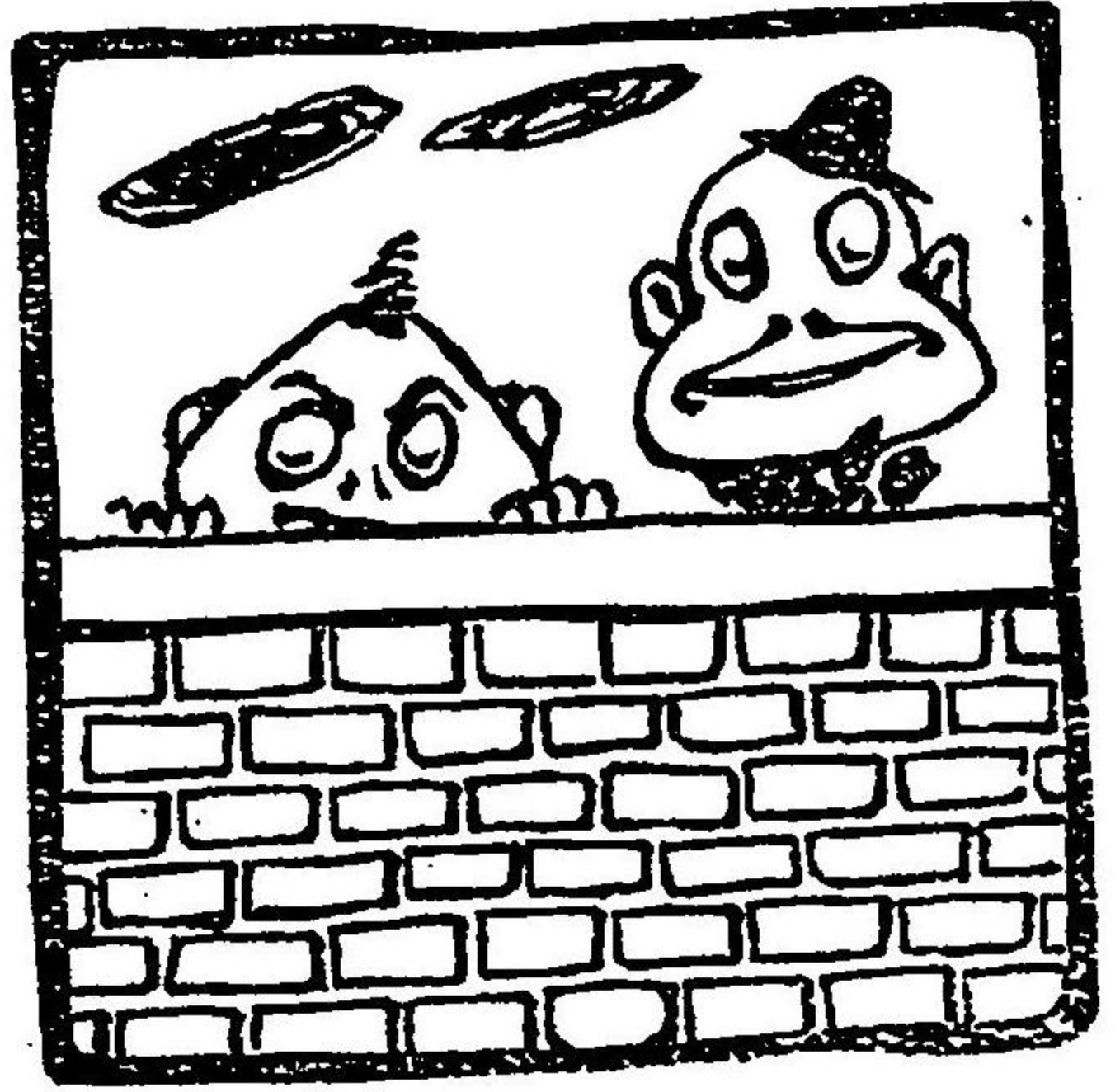
決算

會社員待合に遊び、いざ勘定となると、女將を呼び「決算をしてくれ！」と云ふと女將

何の事か一向に譯らさず、それは何の事でございますか
「あ、譯りました、あの配當の事でございますか」

(明治四十年七月稿)

儼未だいやと嫁に行く氣なり
其明日翌は却々起きて來ず
女房は寝た振をして様子を見
二次會の言葉を先づ腹案し
もんづと組んで相撃と講釋師
れえしと顔を見ながら腹をよみ
自體とさの頭はいいやぐら



豆 鐵 砲

置物

「俺が今此處にある布袋の背中から水を噴かせて見せる」と云ひながら、何か油を塗つたかと思ふと、置物の布袋の背中から水を噴出す、見物手を拍つて、「これは不思議な油だ」と能く見たら、其等鯨油!

仇敵

「さア〜叔父さんが皆にアイスクリームを騙つてやらう」と云ふと借金家の子供「アイスクリームは阿父さんの仇敵だから僕は可厭だ」

鍵屋

盲目兩國の大花火へ出掛けてボンと一つ上る度に手を拍つては「鍵屋〜と怒鳴り、朝方歸つて来てぐつすり寐込むともう十二時、耳元で正午の號砲が威勢よく鳴ると、突然牡蠣のやうな目を睨きながら、「鍵屋ア!」

登山

孝主「新婚旅行などと函嶺や鹽原へ行くのは既に陳腐だ、什麼だ一番奮發して富士登山と捻らうぢやないか」と云へば女房「夢に見た方が

よかあなくつて！」

海水浴

印度人の家族海水浴と洒落たが阿母日向の砂の上に寝込んで居る子供に向ひ「お前そんなところに居ると日に焼けるよ」

車掌

電車の車掌お通夜に行き思はず居眠りながら「動きまアす」と云ふと、坊さん氣を利かして佛の前にある鈴をチン〜……。

秋

「秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の香にぞ驚かぬぬるとあつて自分はまだ夏の氣

で居ても、もう目の先きへは秋が來て居るのだ」と云つて聞かすと無學者したり顔に「それを譯つた」と云ふ、「うむ、何が譯つた」と云へば「今朝往來で俺に衝突つた奴があつたが、あれが其秋に達えねえと云つた」

理屈

「別荘へ美人を蓄へて其處で一夏を暮したら嘸よからう」と云ふと、友達笑ひながら、「それでは君が食へまい……」

舊曆

車掌「乗換の方は切符を拜見します」とベンチを入れて行く中に、一人の乗客一ヶ月餘も前の切符を見せたから、車掌「これは不可ません、もう一ヶ月も前の切符です」と云ふと、客「俺

のは舊曆……」

辭 退

少々下痢をして居るところへ「まあ、そんな事を被仰らすと召上つて下さい」と奇姿を強いられ、持餘した舉句奇と向ふへ押遣りながら、「下した積りでお預けに致しませう」とやつた。

恐 縮

残暑と書くべきを福暑と書いて、残物に福があるよと云ふ意を利かせたのは満更智恵が無いでもなかつたが、初秋と書くべきを七十五日生延び候事と相成り候はちと恐縮！

商 賣 繁 昌

「あれまアそんな勿體ない事をなさるものぢやありません、御飯を粗末にするよと罰が中つて目が潰れます」と云ふと、「占めた」「何が占めたのでござりますえ」と訊くと「商賣繁昌の前兆」と嬉しがる、「御商賣は」と重ねて訊けば、「恐縮ながら銀の目立！」

奇 縁

「不思議な御縁でお隣りへ越して参りました末長くお頼み申します」と云へば隣りの人氣の毒さうに、「それは御念の入りました儀に御座ります、手前共では明日他へ引移ります、末長くお別れでござります！」

屋敷奉公

「妾の娘は只今さるお屋敷へ奉公致して居ります」と、川柳點を其儘の口上可笑しく、「されば何を爲されていござりますか？」と訊けば、「何でも廻しとやらで忙しいと先日手紙を寄越しました」

尊敬語

亞米利加歸りの紳士大に高襟がり、女房は固より下婢までもさん附をして呼んで居たが兩親ばかりフザザ、マザと呼んで居るので「何故目下の者にさんを附けて、兩親にさんを附けないのだ？」と詰ると、「どうも老人にさんは可かしい！」

御挨拶

男學生「歸省して居ても貴嬢の事が想はれて此通り瘦せました、僅か二ヶ月ですがお察し下さい」と云ふと、女學生「せめて三年も歸省して被入つたら忘れて戴く事が出来たのでせうにね！」

二代目

實業家の作俳句に凝り二言目には、「古油や」とやるに阿父眉を顰め、「唐様で書く三代目と云ふ語があるに少しは矯なめ！」と叱れば、作済したもので「二代目は大丈夫！」

大漁

「この汐へ乗込めば大漁は受合！」と云ふ漁

夫の口前に敷かれて乗出したが一向に取れず
寄おい／＼ちつとも網へかゝらないぢやない
か」と云へば、漁夫まご／＼しながら、「一疋
でもかゝれば大漁だかなア！」

羽衣

海水を浴びた後禪を干して置くとひらく
と中天へ舞上る、不思議な事もあるものと見
て居ると、雲の間から天人の聲として、「あゝ
臭い羽衣があるものぢや」と忽ち下界へまた
ひらく！

懸賞

甲「中形浴衣地模様懸賞に應じたがまんま
と失敗した」乙「はてね、君にして失敗する
は什麼云ふものだ、全體甚麼模様を出したの

だ」と云ふと 甲「据模様！」

夢

女「ほんにあの時の事を考へると宛然夢を見
たやうなものでございますね」男「誰がお前に
あんな夢を見ろと云つたえ！」

亡者會議

四十五年の大博覽會敷地が愈々青山となり
さうだと云ふ噂を聞き、共同墓地の亡者大に
驚き協議を開く様子だから、はて何事であら
うと聞くと、「なアに、博覽會見物がてら墓脂
が増へて困るだらう、今の中何處へか化け換
へをしやう」と云ふ相談！

蓼太の句

「蓼太の句に「三味線に唐臼のせる暑さかな」と云ふ句があるが什麼も譯らない！」と近頃俳諧の道に別入つた紳商首を捻て居ると、娘側から「夫は家の移轉の時の句なんでせう！」

人糞官糞

一時市營にならうとして採消された人糞問題が、今度は官營と云ふ事に愈々極る、先づ掃除屋さんの服装が好いね、フロックコート、脚絆草鞋と云ふやつで、「オワイイ！」

懸行燈の意匠

一町内聯合賣出とあつて懸行燈に意匠を凝した中に、一つ白紙があるから能く見たら、

それは葬儀屋！

冤罪

紳士済した顔をして電車へ乗ると、車掌大きな聲で、「混雑ひますから懷中物を御要心！」と呼ぶ、紳士大に憤れ、「失敬な、俺は拘模ちやアない」と云へば、乗合の一人「愈々拘模ちに違ひない」と遂々拘模にされてしまつた。

(明治四十年十二月稿)

太平樂終

河止めにあつた朝顔泣きあてる
岩永は男らしいでいやがられ
光秀は先づ節穴を覗いて見
毒を食へば折までと脚散かし
時姫は由來遊兵お好きなり

自跋

自序と云ふ事は世に多くあり、自跋と云ふは
鳥渡稀らしかるべし、そこが即ち太平樂たる
所以、これを曾呂利新左衛門氏に問へば、よか
らう」と云ひ、十返舎一九氏に質せば、奥でけ
せうと答へ、式亭三馬氏へ持つて行けば、面白
いね」とある、其處で大に氣樂りがして曰く、抑
も太平樂は萬歳樂の分家にして、後生樂の本
家なり、これを苦の種と云ふ、未だ深く樂を知
らざるもの、官のみ疑ふらくは、來つて太平
樂を讀み給へと書いつくる、後るに人在つて
云ふ、「大分苦しきうな文句だ！」あゝ跋が惡
い？

明治四十一年三月廿五日印刷

定 價

明治四十一年三月廿八日發行

四 拾 錢

笑文庫第二編
不許複製

編輯者 東京市麹町區内幸町一丁目五番地
光村合資會社出版部

右代表者 黒田直道

印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地
山田英二

印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地
博文館印刷所

發行所

光村合資會社出版部

東京市麹町區内幸町一丁目五番地

笑文庫 第三編

黒田湖山先生著

滑稽新婚旅行

五月上旬發行

笑文庫の大好評

笑文庫は江湖の喝采を博し非常の歡迎を受けつゝあり今左に第一篇『笑ひ山』に對する世評の一二を抄録せん。

◎讀賣新聞 小波氏の隨筆、喜劇等の十餘種を蒐めたる本にして、いづれも洒脱輕妙なる滑稽趣味に富めるを以つて『笑ひ山』の名あり、氣の利きたる製本なり。

◎日本 人生の喜劇的方面の開拓に志せる光村合資會社にては今回……樂天愛人、欣々として世に活きん事を願ふの意欲よりして笑文庫を出版するの計畫あり、本書は輕口、狂言、喜劇、笑話等十數篇、皆一讀願を解かしむるに足るもの、諺に笑ふ門には福來ると恐くは其の一本を緋けば招かずして福來らんなり。

◎大阪時事 文運の盛なる今日、夥しき著書の多くは人生悲哀の方面を描けるを憾として新に出版されし笑文庫の第一篇なり、樂天愛人、欣々として世に活きん事を希へる小波山人が執筆せるものにして、輕口あり、狂言あり、喜劇あり、いづれも皆願の用心して讀むべきものなり。

◎やまと新聞 滑稽雜誌『笑』を以つて多くの人を笑はせて居る光村合資會社出版部にては又も笑文庫の出版にかゝり、第一篇に巖谷小波氏の滑稽物を集めたる『笑ひ山』を發行したり、製本印刷の美は同社の特色、高尚なる滑稽は著者の特色、共に富士筑波の笑ひ合ふが如し。

笑文庫第壹篇

巖谷小波先生著 岡野茶(茶表紙新) 先生挿畫(工夫美木)

笑ひ山

▲定價一部金四拾錢◎郵稅六錢

◎笑う浮世の憂苦を忘るれんとす必此の書讀め！◎樂天的家庭の本箱は必ず此書無からざる◎輕口狂言の警拔劇の談話自在なる皆一讀

- ▲輕口▼ ◎正 月 ◎珍 竹 姫 ▲紀行▼
- ◎初 笑 ◎迎 松 ▲漫筆▼ ◎鹿島落の記
- ◎惠比須切 ◎耳 競 ◎柳の落葉 ◎潮來無詞
- ▲狂言▼ ▲昔噺▼ ◎畜生氣煽 ▲喜劇▼
- ◎師 走 ◎蹄鐵上人 ◎洋燈大明神 ◎家政學校

新落語

▲部一廿四錢◎郵稅一錢五厘

- ◎宗達筆風神 三色寫真版
- ◎住吉踊 中澤弘光筆
- ◎美人風俗史(共業) 六島沖舟筆
- ◎美人寫真 葉
- ◎難有物結語 新落語
- ◎流式熊行 巖谷小波
- ◎無種痘 岡岸太
- ◎火種痘 山岸太
- ◎増記火種痘 武田櫻桃
- ◎雪とんや 武田櫻桃
- ◎三枚起請 武田櫻桃
- ◎うどんや 武田櫻桃
- ◎小噺碎金 武田櫻桃
- ◎輕口笑賣往來 武田櫻桃
- ◎滑稽戀寸帳 武田櫻桃
- ◎輕口徹小紋 武田櫻桃

新落語は諸名家が特に本社の特許に依り新作されたる新落語を録せるものにして滑稽談話、快辯才筆應接に逸なき趣あり、附録として添へたる小噺碎金は江戸時代

に於て有名なる輕口小噺百冊の中より、最も面白きもの約百題を選抜せるもの、憚れたるもの慰藉を欲するものは一本を購うて新落語の如何に新趣に富めるかを味へ！

發行元 東京市麹町區 光村會社出版部 内幸町一ノ五

工業經濟 窪田重式先生著
專攻者

工業實地經營論

菊判總クロース 定價壹圓貳拾五錢
金文字入美裝 製本既成發賣

工業を實際に營まんとするもの若くは工業經營に關係を結ばんとするものが、最も渴望し最も要望しつゝある物は、一に工業の實地經營に對し指針となり案内者となるべき書籍の絶無なりし事也。事實、工業に關する書籍の刊行政へて少なからずと雖も、多くは理論に傾き、實驗に依り周密に親切に其の經營策を講じたるものは未だ曾つて有らず、今即ち此の書あり。著者は工業經濟を專攻して、曾つて英獨兩國に留學し、歸來大工業の實地經營に親接して命名あり。此書は工業の實地經營に對し、先生が蘊蓄せる其學識と、實地より得たる其經驗とを傾盡して、工業の海に船を浮べんとするものが水先案内者たるを期せられたるもの也。

東京市麴町區内幸町一丁目五番地

發兌元 光村合資會社出版部

樂しく日を送ら笑を讀福祿を希ふ笑を讀
んとする者は笑め！

▲讀物▼◎滑稽小説◎時事狂言◎名士逸話奇談◎時事
諷言◎滑稽輕口◎名家閑談◎家庭笑話◎川柳、狂歌◎
一口噺◎都々一◎替歌◎落語

上品な
る滑
稽文
藝雜誌



毎月二回
發行
五日二十日

▲繪畫▼◎彩色漫畫二葉 ◎二色版名勝寫真一葉
◎演劇光景寫真 一葉 ◎美人寫真 二葉

其他廿餘の漫畫何れも一見
木版の漫畫抱腹の珍材

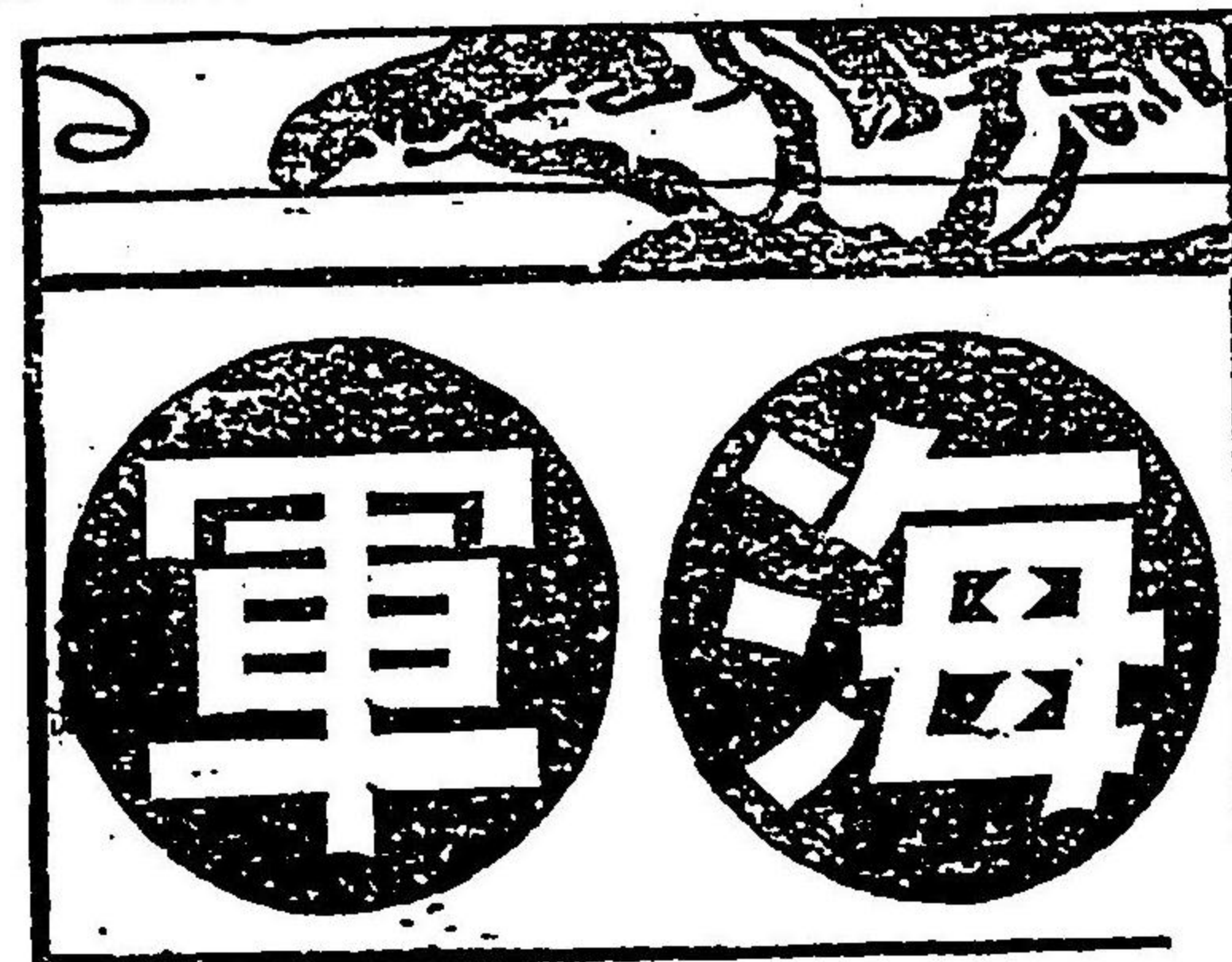
長壽を欲す笑を讀病を治癒せんと笑を讀
る者は笑め！

▲一拾貳錢 郵稅壹錢◎半年分郵稅増刊共壹
部 四六拾錢◎一ケ年同參圓參拾錢

發行所 光村合資會社出版部

東宮殿下賜御覽

(月刊) 寫真雜誌 (每月一回發行)



定價部 錢五拾 郵部 錢九 稅部 錢十 郵部 錢七 郵部 錢四

發行所 東京市東區幸目一丁目五光村合資出版部

★日本唯一の海軍雜誌★

★日本隨一の美麗な雜誌★

258
507

光村合資會社
出資部